

# 豆塚遺跡 東新居遺跡

山梨県中央自動車道  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1984.3

山梨県教育委員会  
日本道路公団

# 豆塚遺跡

## 序

本報告書は、中央自動車道建設にさきだち、甲府盆地の東部に位置する山梨県東八代郡一宮町地内において発掘調査された豆塚遺跡および東新居遺跡の調査報告書であります。

一宮町地内は、埋蔵文化財の分布がきわめて濃密で、数多くの遺跡が確認されております。とりわけ金川・大石川・京戸川等の扇状地には原始・古代から人々の営みがあったことが知られており、縄文時代の大集落や古墳時代後期の古墳群などが著名であります。また、奈良・平安時代関係では、条里の地割を窺うことができるすことや国指定史跡甲斐国分寺跡、同国分尼寺跡が所在することなどから、律令期の甲斐国の歴史を知るうえでもっとも注目される地域であります。

豆塚遺跡は、金川流域における群集墳の一つ豆塚古墳とその周辺地域の遺跡であり、調査の結果、古墳の周溝と推定されるものを発見するとともに、縄文時代晩期の住居址、土塹、および中・近世の水溜造構等を検出いたしました。また、東新居遺跡では、県内でも類例の少ない平安時代末期の堅穴住居址10軒が調査され、良好な資料を得ることができました。両遺跡の発掘調査の成果は、地域の歴史を解明するうえで貴重な資料となることが期待されております。

おわりに、種々御協力を賜わった関係機関各位並びに直接調査に従事していただいた方々に改めて心から感謝の意を表します。

1984年3月31日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磐貝正義

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和54年度に日本道路公團東京第二建設局から委託されて山梨県教育委員会が実施した東八代郡一宮町に所在する豆塚遺跡、東新居遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書作成の経費は、昭和57年度に日本道路公團東京第二建設局と山梨県教育委員会の契約による。
3. 豆塚遺跡の発掘調査は、末木健・長沢宏昌、出土品等の整理及び報告書の作成は、長沢宏昌・保坂康夫・中山誠二が担当した。  
東新居遺跡の発掘調査は、田代孝・小野正文、出土品等の整理及び報告書の作成は、田代孝・小野正文が担当した。
4. 本報告書の編集は、田代・長沢・中山が行い、次のように執筆を分担した。

豆塚遺跡	第Ⅰ章～Ⅱ章—中山	第Ⅲ章—長沢	第Ⅳ章1—長沢・中山	2—保坂
	3—長沢	4—末木	第Ⅴ章—長沢	
5. 東新居遺跡 第Ⅰ章～Ⅳ章—田代
6. 写真撮影は、豆塚遺跡の遺構を末木・長沢、東新居遺跡の遺構を田代・小野、両遺跡の遺物を塙原明生が行った。
7. 本報告にかかる出土品及び記録図面、写真等は、一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8. 出土品整理参加者  

豆塚遺跡	石田文次郎・石川龍子・宝福寿美江・遠藤映子・山本治代・渡辺　薰・ 高野俊彦・羽中田恵子・丸山孝子・広瀬千江美・小沢君香・坂本穂波
東新居遺跡	新津重子・日向千恵・石川　操・大浦慧子・若尾悦子・松野和美・内藤 真千子
9. 本報告書の作成にあたって、次の諸氏に御指導を賜わった。記して謝意を表する次第である。

植松春雄（理学博士）・齊藤孝正（名古屋大学助手）・奈良泰史（都留市教育委員会）・ 服部敬史（八王子市教育委員会）	（順不同・敬称略）
---	-----------
10. 「豆塚遺跡」は、当初豆塚古墳・豆塚遺跡として調査が行われたが、古墳はすでに削平されおり、周溝のみの確認であったため、一括して豆塚遺跡として報告する。

## 本文目次

第 I 章 調査状況	1
1. 発掘調査に至る経過	
2. 調査組織	
第 II 章 遺跡の概況	2
1. 遺跡の位置	
2. 地理的環境	
3. 歴史的環境	
4. 遺跡の層序	
第 III 章 遺構	5
1. 1号住居址、出土遺物	
2. 1号土塁	
3. 2号土塁	
4. 3号土塁	
5. 4号土塁	
6. 1号集石	
7. 2号集石	
8. 3号集石	
9. 2号溝	
10. 1号溝・方形石組遺構	
第 IV 章 遺物	19
1. 土器	
2. 石器	
3. 土製品・石製品	
4. 瓦	
第 V 章 まとめ	38
参考文献	39

## 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	3
第 2 図	層序	4
第 3 図	豆塚遺跡全体図	5
第 4 図	1号住居址平面図および遺物出土状態	6
第 5 図	1号住居址出土土器(1)	7
第 6 図	1号住居址出土土器(2)	8
第 7 図	1号住居址出土土器(3)	9
第 8 図	1号・2号土塁	11
第 9 図	3号土塁	11
第 10 図	4号土塁	12
第 11 図	4号土塁出土台付甕	12
第 12 図	4号土塁出土土器	12
第 13 図	1号集石	13
第 14 図	2号集石	14
第 15 図	3号集石	15
第 16 図	2号溝	16
第 17 図	2号溝出土須恵器	16
第 18 図	2号溝出土土器	16
第 19 図	方形石組遺構	17
第 20 図	方形石組遺構出土甕	17
第 21 図	1号溝・方形石組遺構	18
第 22 図	1号溝出土土偶	18
第 23 図	グリッド出土土器(1)	20
第 24 図	グリッド出土土器(2)	21
第 25 図	グリッド出土土器(3)	21
第 26 図	グリッド出土土器(4)	24
第 27 図	グリッド出土土器(5)	25
第 28 図	石 器(1)	31
第 29 図	石 器(2)	32
第 30 図	石 器(3)	33
第 31 図	石 器(4)	33
第 32 図	土製品・石製品	35
第 33 図	瓦	37

## 図 版 目 次

- |        |                            |                    |
|--------|----------------------------|--------------------|
| 図 版 1  | (1) 遺跡全景                   | (2) 遺跡全景           |
| 図 版 2  | (1) 作業風景                   | (2) 1号住居址          |
| 図 版 3  | (1) 4号土塹台付甕出土状態            | (2) 2号溝            |
| 図 版 4  | (1) 1号集石（確認時）              | (2) 1号集石（集石取りはずし後） |
| 図 版 5  | (1) 1号溝・方形石組遺構             | (2) 方形石組遺構         |
| 図 版 6  | (1) 1号住居址出土土器              | (2) 1号住居址出土土器      |
| 図 版 7  | (1) 4号土塹出土土器               | (2) 4号土塹出土土器（台付甕）  |
| 図 版 8  | (1) 2号溝出土須恵器               | (2) 方形石組遺構出土土器（甕）  |
| 図 版 9  | (1) グリッド出土土器（早・前期）         | (2) グリッド出土土器（前期）   |
| 図 版 10 | (1) グリッド出土土器（中・後期）         | (2) グリッド出土土器（後期）   |
| 図 版 11 | (1) グリッド出土土器（晩期）           | (2) グリッド出土土器（晩期）   |
| 図 版 12 | (1) グリッド出土土器（晩期）           | (2) グリッド出土土器（晩期）   |
| 図 版 13 | (1) グリッド出土土器（晩期）           | (2) 土製品・石製品        |
| 図 版 14 | (1) 石 器（石鐵）                | (2) 石 器（打製石斧）      |
| 図 版 15 | (1) 瓦（表面）                  | (2) 瓦（裏面）          |
| 図 版 16 | 1号住居址出土炭化物（クヌギ・クリ・クルミ各表裏面） |                    |

## 第Ⅰ章 調査状況

### 1. 発掘調査に至る経過

- 昭和54年11月21日 文化庁に発掘通知を提出する。
- 11月22日 日本道路公団と発掘調査の概算見積、工程について協議する。
- 11月28日 道路公団より県教育委員会へ発掘調査委託契約の協議書が送付される。
- 11月30日 契約を締結する。
- 12月3日 発掘調査を開始する。
- 12月18日 文化庁より県教育委員会へ発掘通知の受理通知書が送付される。
- 昭和55年2月15日 発掘調査を終了する。なお、調査終了後石和警察署へ発見通知を提出する。

### 2. 調査組織

- 調査主体 山梨県教育委員会
- 調査担当者 末木 健（県文化財主事）  
長沢宏昌（県文化財主事）
- 調査員 井川達雄（明治大学卒業生）
- 調査補助員 渡辺儀訓（明治大学学生）
- 作業員 中川文武・早川かとり・川上勝子・中村みどり・武田良子・奥村澄江・中沢益・  
小林竹子・水谷富子・小林富志江・田草川かみじ・金子よし恵・田草川日出子・  
田中きくの・豊角ちかの・田草川和子・広瀬咲代・雨宮照子・水上紗子・原田  
好子・深山幸子・田中仁子・深山友雄・窪島睦男・武田広・深山光揚・中島保・  
池田端治・小林弘樹・山下千鶴子・飯島君江・古屋邦治・飯島きく子・飯島和  
子・雨宮節江・関とよの・河野美津子・古屋とき恵・飯島聰・稻葉みち子・産  
田満子・稻葉かめ代・須田君子・古屋きく・雨宮八重子・雨宮延子・雨宮和子・  
古屋昌千代・小沢さち江・古屋きくみ・須田み代・須田篤子・古屋一恵・古  
屋フジ江・飯島明子・飯島照乃・原田かつ子・飯島昭子・榎原登紀子・豊島勝  
美・雨宮久子・雨宮今子・雨宮みよじ・稻葉照江・久保田典雄・日原喜昭・今  
泉ちか子・村松和乃・前島益雄・村松とし子

（順不同）

## 第Ⅱ章 遺跡の概況

### 1. 遺跡の位置

山梨県東八代郡一宮町国分字南条、堀米に所在する。

### 2. 地理的環境

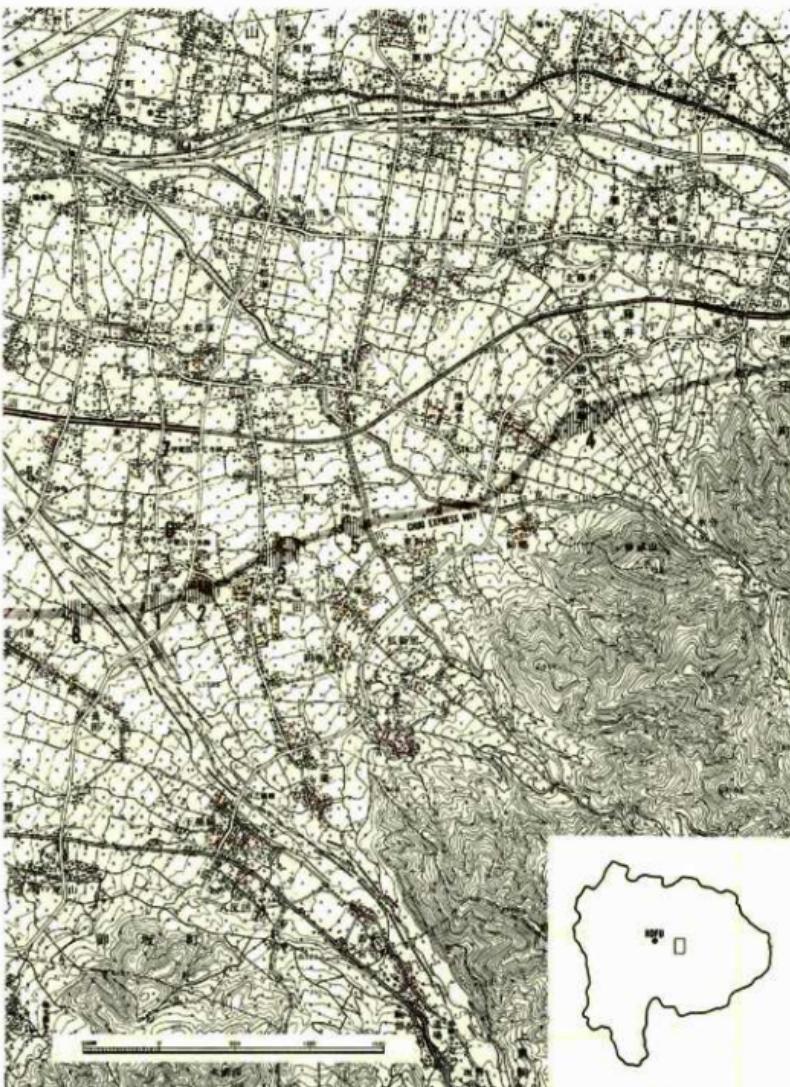
遺跡の所在する一宮町は、甲府盆地東部に位置し、笛吹川の支流日川と金川にはさまれて存在する。町の北側を山梨市と勝沼町、西側を石和町、南側を御坂町、東端を大和村に接している。この地は甲府盆地南東部を北東から南西方向にのびる断層崖の下に、金川、日川、京戸川、大石川、御手洗川などの幾筋もの河川によって作られた扇状地が接合して、複合扇状地を形づくっている。遺跡は、これらの扇状地中でも最も大きい金川扇状地上に立地する。標高は約370mを測る。

### 3. 歴史的環境（第1図）

上記の河川によって形成された扇状地上には、数多くの遺跡が分布することで知られる。中でも京戸川扇状地扇尖部に位置する积迦堂遺跡群（4）では、ナイフ形石器や尖頭器を含む先土器時代の石器が発見されており、当該地域における居住が縄文時代以前に遡ることを決定づけた。又同遺跡群では、縄文時代早期末～中期に至る住居址、土塙などが数多く発掘され該期の集落構造や生活様式を知る上で全国的にも貴重な資料を提供している。時代的にこの間を埋める資料としては、笠本地藏遺跡（2）の有舌尖頭器、豆塚遺跡（1）の押型文土器がわずかに知られるのみである。一方、中期に増大した遺跡数は、後期になると次第に減少し、晚期に至ってはその数も非常に少なくなる。今回豆塚遺跡で得られた晚期前半の資料は、その意味で貴重であり、盆地東部の該期の土器様相をとらえる上でも非常に興味深いものといえる。

「豆塚」の遺跡名から推定できるとおり、遺跡周辺には古墳時代後期の古墳が密集している。金川右岸の自然堤防上に展開されたこの群集墳は国分古墳群と呼ばれ、同左岸の四ツ塚古墳群（8）と共に甲府盆地東部の周縁部に拡がっていた一連の古墳群のひとつとして位置づけられる。かつてこの付近には数百基の古墳が存在したと言われるが、開墾などによる削平で現在その形をとどめるものは、わずか40基程である。同様の群集墳は同町千米寺地内にも存在し、千米寺古墳群と呼ばれる。

続く古代律令期になると甲斐国は東海道の一国として建置され、駿河国で東海道本路から分岐し篠坂、御坂峠を経て甲斐国府に通じる官道が金川に沿って存在した。これが、「甲斐路」であり、以後古代甲斐国の交通の要衝として文献に登場する。当時官道の要所には駅が設置され一定数の駅馬が常置されていたが、甲斐路の場合、『延喜式』に「甲斐国駅馬、水市・河口・加



1. 豆塚遺跡 2. 笠木地蔵遺跡 3. 北畠遺跡 4. 釈迦堂遺跡群  
5. 東新居遺跡 6. 甲斐国分僧寺跡 7. 甲斐国分尼寺跡 8. 四ツ塚古墳群

第1図 遺跡位置図

吉各五疋」(加吉は加古の誤りか)とあり、3つの駅に各5疋の馬が置かれていたことがわかる。この内、水市駅は現在の一宮町市之藏あるいは御坂町上黒駒にあったとされる。

当時の国庁である甲斐国府の位置については、現在の春日居町国府に初期の政庁があり、笛吹川の氾濫によって後に金川左岸の御坂町国衙地内に移ったとされるが、その間に一宮町国分を加えて国府三転説をとえる学者もいる。また、豆塚遺跡の北方300mには甲斐国分僧寺跡(6)があり、そのさらに北側に甲斐国分尼寺跡(7)が存在することから、いずれにせよ甲府盆地東部のこの地域が古代甲斐国の政治・文化の中心であったことは疑いない。

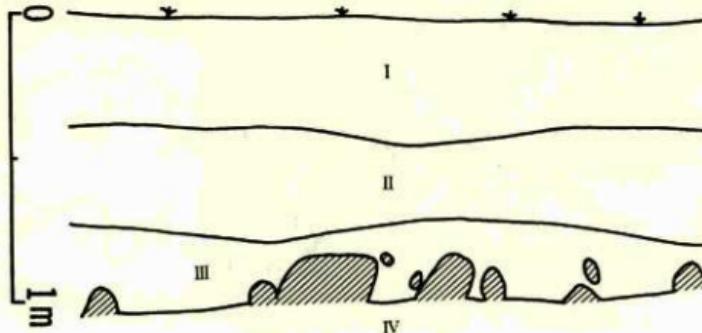
したがって、付近には奈良時代から平安時代の集落跡も数多く発見されている。近年調査された国分僧寺と尼寺の中間地域に立地する松原遺跡では、平安時代の住居跡が著しい重複関係をみせながら確認されており、該期における集落の発展が目ざましいものであったことを裏づけている。同遺跡は、和名抄記載の郷名の記された墨書き土器や豊富な縄文陶器なども伴出しており、国分寺周辺の集落を解明する上できわめて重要な遺跡である。一方、豆塚遺跡の東側に位置する笠木地蔵遺跡(2)、北堀遺跡(3)、東新居遺跡(5)からは平安時代末期の集落跡も確認されており、古代における付近の繁栄を窺うことができる。

#### 4. 遺跡の層序 (第2図)

豆塚遺跡の標準層序は、4層に分かれる。

第Ⅰ層	(表土層)	耕作土
第Ⅱ層	(黒色土層)	粘性をおび粒子が荒い
第Ⅲ層	(黒色土層)	粘性をおび粒子が細かい
第Ⅳ層	(黄褐色土層)	礫を多量に含む砂質土

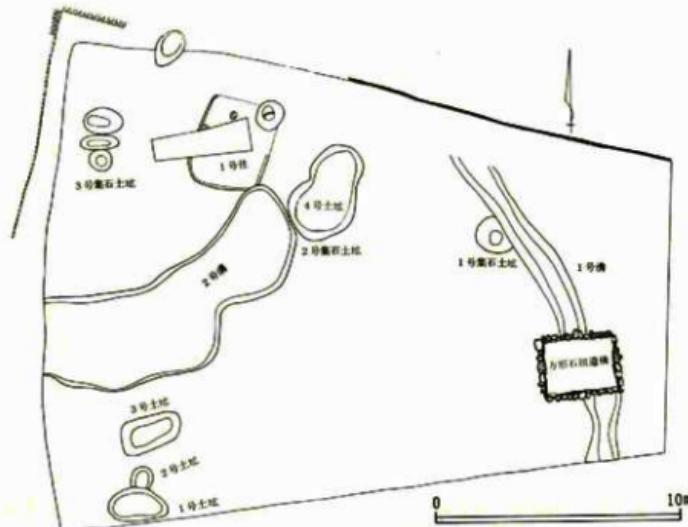
豆塚遺跡は、金川の自然堤防上に位置するため河川によって形成された砂疊層(第Ⅳ層)を地山とし、遺構はⅡ層あるいはⅢ層から掘りこまれⅣ層に至っている。



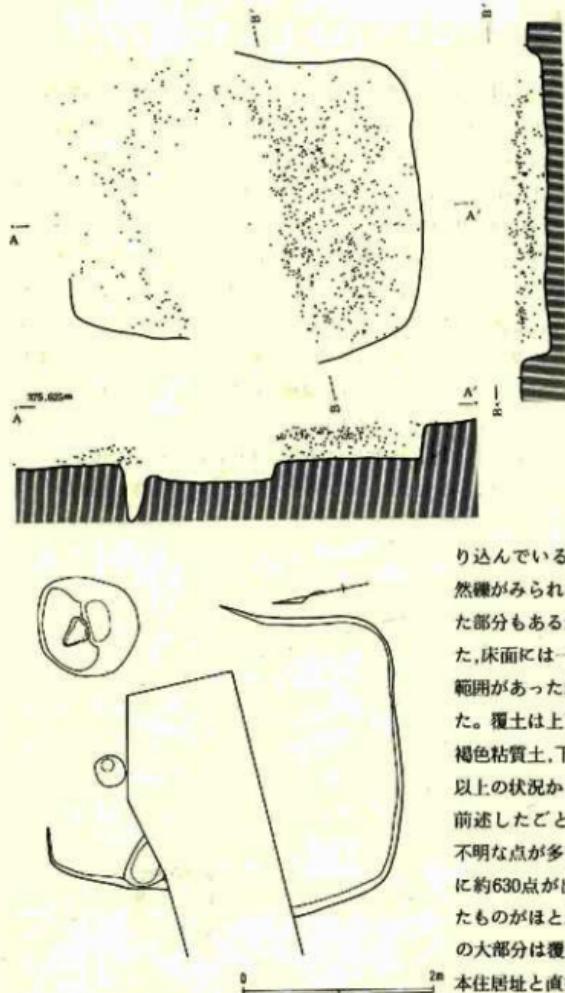
第2図 層序

### 第Ⅲ章 遺構

豆塚遺跡は、以前から表面採集・耕作中の遺物出土などにより、縄文・平安時代の集落・古墳の存在が予想されていた。事前の表面採集では縄文式土器、土師器、須恵器の散布が確認され、STA545 + 60 ~ 546 + 60にかけての長さ100m、幅40m、約4,000m<sup>2</sup>が調査の対象となった。調査対象域は、農道により制限された西端約25m（約400m<sup>2</sup>）が微高地となっており、中央部にはゆるやかな谷が形成され、東はふたたび微高地となって近接の笠木地蔵遺跡へと続いてゆく。遺物は谷より西側に多くみられた。縄文時代晚期の土器、石器、土製品を中心に、縄文時代早期～後期の土器、石器、弥生時代末の土器、古墳時代以降の土師器、須恵器、瓦などが出土した。遺構は西端のわずかな微高地にのみみられ、IV層上面を確認面としている（第3図参照）。住居址1軒、土塁4基、集石3基、溝2本、方形石組遺構1基が検出されたが、微高地は農道によって一部削平されているため、さらに西側に遺構が存在したと考えられる。当初存在が予想された古墳は確認されなかったが、2号溝より須恵器が出土していることから、本溝が古墳の周溝である可能性もある。中央部の谷には、Ⅲ層黒色土中にみられる人頭大以上の礫が密集し、遺構は検出されなかった。また調査区東側においても遺構は確認されなかった。



第3図 豆塚遺跡全体図



第4図 1号住居址平面図  
および遺物出土状態

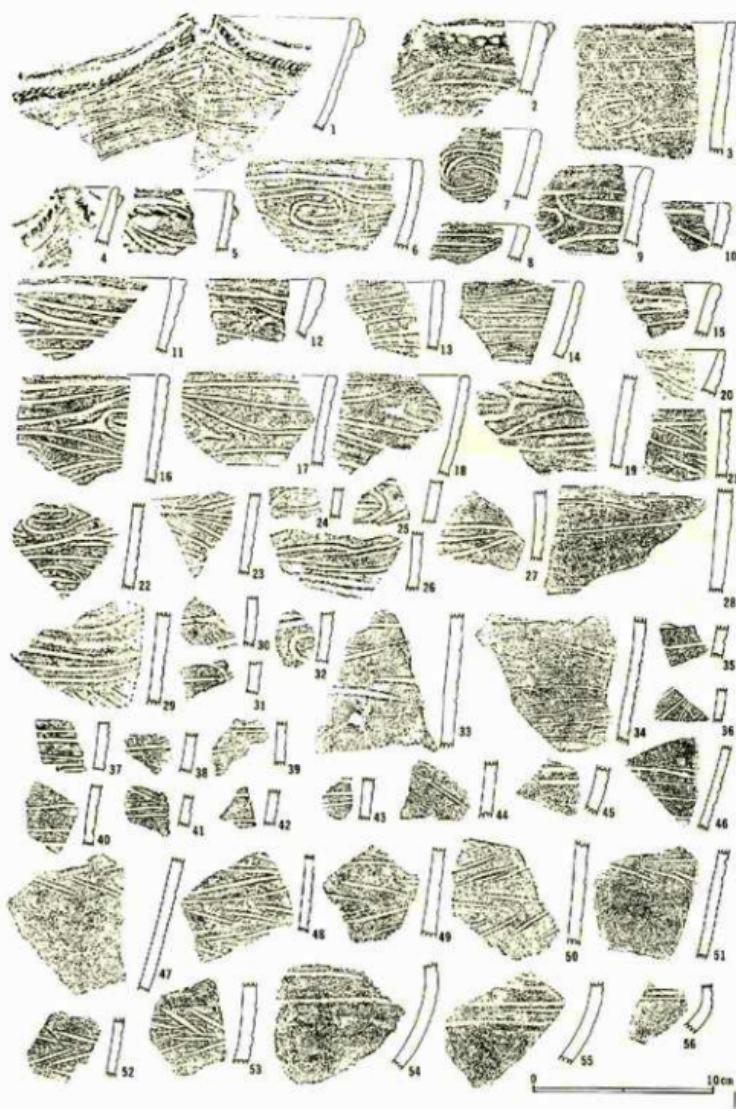
### 1. 1号住居址

隅丸方形を呈し、長径3.5m、短径2.7m、壁高0.3mを計る。中央部に搅乱があるため、炉、柱穴等の施設は不明である。西壁際には皿状の浅い掘り込み(50×40×8cm)、中央北西寄りのピット(30×30×50cm)、北東コーナー付近の円形ピット(100×100×40cm)が確認されたのみであった。

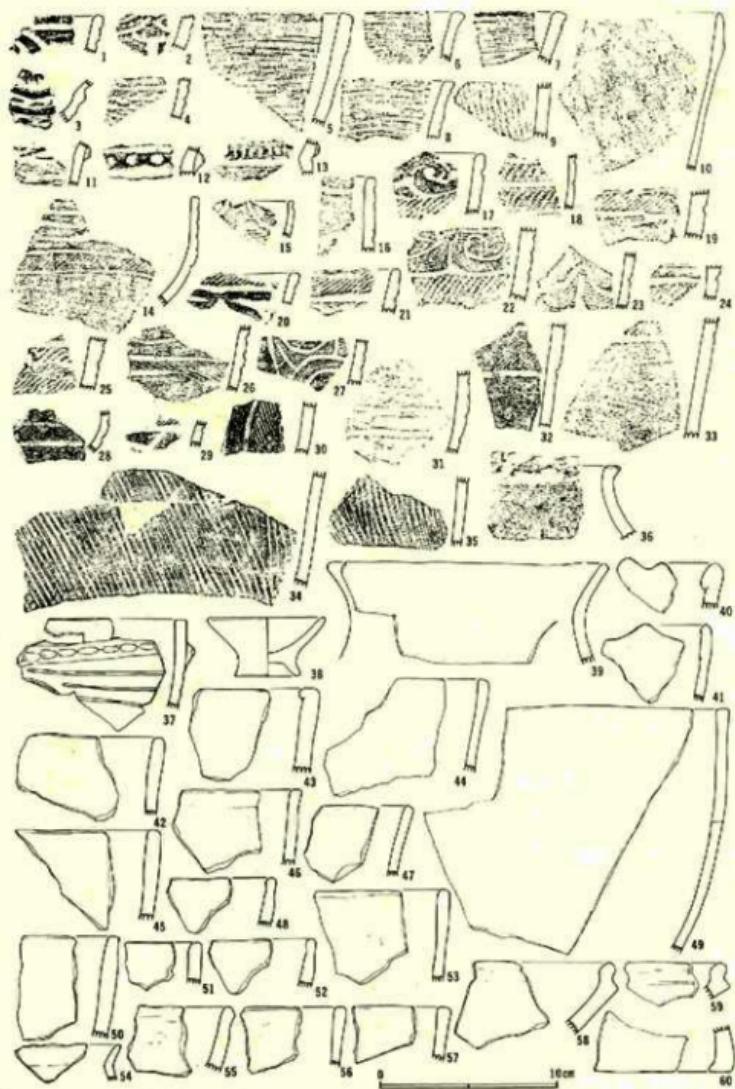
本住居址は、地山である黄褐色砂質土層を掘り込んでいるため、壁面、床面ともに自然礫がみられた。床は堅く踏みしめられた部分もあるが、総じて軟弱である。また、床面には一部にカーボンの集中する範囲があったが、焼土は確認されなかつた。覆土は上下二層に分かれ、上層は暗褐色粘質土、下層は黒色粘質土である。

以上の状況から本遺構を住居址としたが、前述したごとく、炉址、柱穴、形状など不明な点が多い。遺物は、土器片を中心約630点が出土したが、小破片となつたものがほとんどである。これらの遺物の大部分は覆土中からの出土であるため、

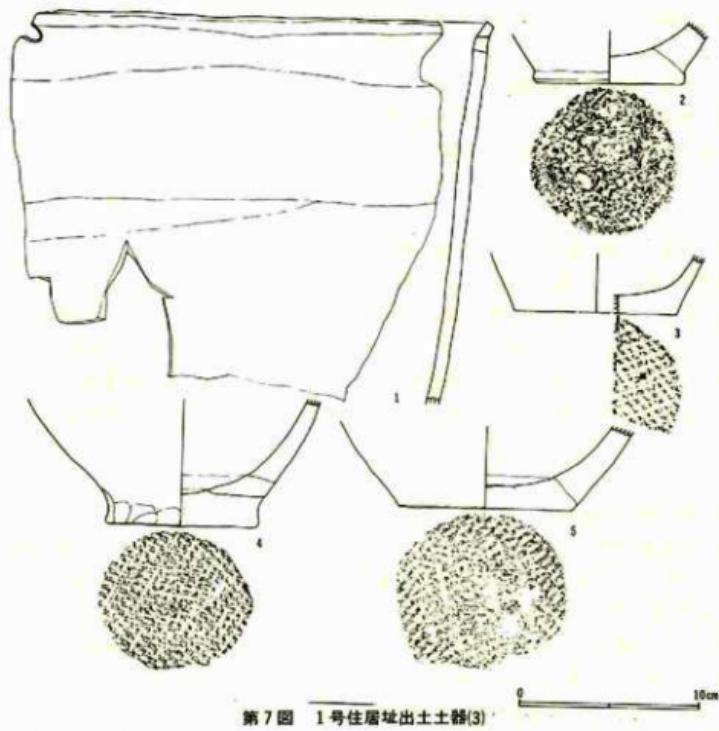
本住居址と直接つながらないものの、わずかながら出土した床面付近出土の土器とは差がなく、本住居址と出土遺物との時期は大差ないものであろう。



第5図 1号住居址出土土器(1)



第6図 1号住居址出土土器(2)



第7図 1号住居址出土土器(3)

#### 出土遺物

##### ① 土器（第5図～第7図）

縄文時代晩期の清水天王山式を中心に出土しており、清水天王山式（第5図）とそれに伴出すると考えられる土器群（第6図、第7図）がある。本住居址出土の清水天王山式土器は深鉢形がほとんどで、口縁の形状には平縁と波状口縁がみられる。波状口縁をもつものには刻目突帯が付き、平縁の一部にも付く。ただし、清水天王山式には口縁に小突起が付き刻目突帯が一周するタイプが存在するため、平縁に刻目突帯の付くものは、その「部分」とも考えられる。口縁部文様帶では、沈線による入組文（第5図1・3・6・22など）と入組状三叉文（16～19）があり、弧状あるいは直線の沈線文（11～15など）は、これら主文様を連絡する部分である。胴部には綾杉状沈線文（47～53など）が施される。清水天王山式に伴出する土器には、沈線文（第6図1～4）、条痕文（5～10・34・35）、磨消繩文（14～33）、刻目突帯文（11～13）、無文（38～57・60、第7図）などがみられる。これらの土器については後述するが、縄文時代晩期

前半、大洞B-C式、安行3b式期に比定されよう。

#### ② 石器（第28図～第30図）

覆土中より19点の石器が出土している。磨製石斧1点、ドリル1点、スクレイバー1点で他は石鏃である。黒曜石、チャートを使用しているが、石鏃は形態がさまざまであり、詳細は後述する。

#### ③ 土製品（第32図1～8・10・35・36）

滑車形耳飾9点、土偶2点が出土している。表面に透彫りがあって環状のもの（1）、小型で環状のもの（2・3）、中型で環状のもの（4・5）、穿孔されるものの（6・7）、円筒形のもの（8）、裏面が凹んで表面に施文されたもの（10）多くの種類がみられる。耳飾については後述する。土偶はいずれも小破片で、35は腕部先端と思われる。赤褐色を呈するが、朱彩されていたらしく、わずかに赤色顔料が残存している。36は肩部破片と思われ、黒色を呈し、よく磨かれ光沢がある。

#### ④ 炭化物（図版16）

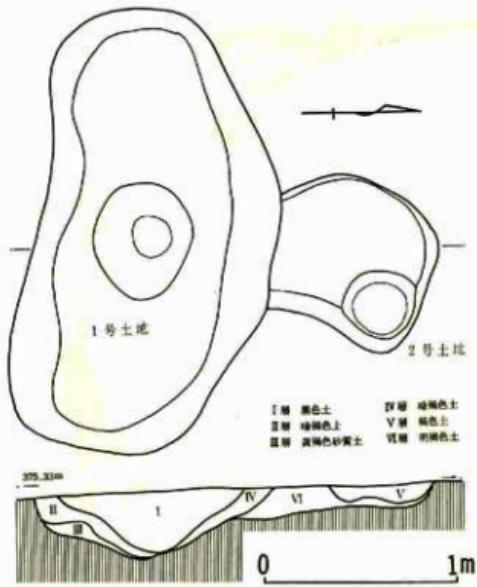
本住居址覆土中から、約50点の炭化物小破片が出土している。これらの炭化物は集中することなく、またレベルも床にちかいものから、覆土上層にまで散っており、さまざまである。このうち、堅果と考えられるものが9点ある。完形で出土したものは2点だけで、いずれもクリである。計測値は、高1.6cm、幅1.6cm、厚0.7cmおよび高1.2cm、幅1.2cm、厚0.6cmであり、小型である。他にクリと考えられる小破片が数点あるが、いずれも推定幅1.5cm以下程度の小型のものである。これらには表面に縦方向の細いシワが認められる。半完形の炭化物にドングリ類の一類があり、クヌギに類似する。クリと違い、表面のシワは認められず、断面は不整ハート形で先端は尖っている。高1.5cm、幅1.5cmを計る。他に、クルミの殻果らしき破片がある。

### 2. 1号土塙（第8図）

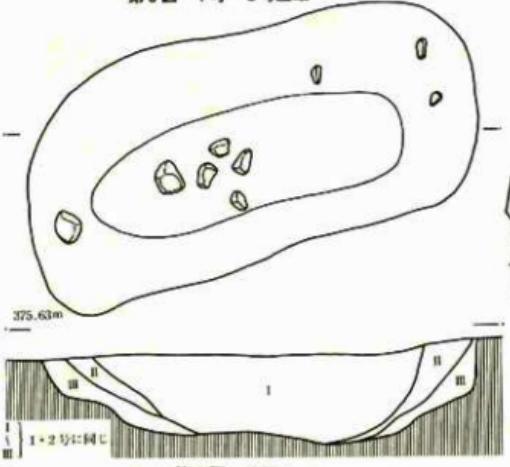
調査区南西端に確認された土塙である。不整形を呈し、長径約2.3m、短径約1.2m、深さ0.4mを計る。主軸はほぼ東西方向である。これも黄褐色砂質土層に掘り込まれたもので、底面には砂礫がみられる。本土塙からは滑車形耳飾1点（第32図11）が出土している。小型の非常に薄手のもので、黒色を呈し、磨き、焼成とも良好である。本土塙からの出土遺物はこれが唯一であるが、その性格上墓塙と考えられる。

### 3. 2号土塙（第8図）

1号土塙に切られているため、正確な形状・規模は不明であるが、不整形、長径1m以上、短径0.7m、深さ0.2m程度と推定される。1号土塙と直交するように主軸はほぼ南北である。や



第8図 1号・2号土塚



第9図 3号土塚

はり、黄褐色砂質土層に掘り込まれ、底面に砂礫がみられる。出土遺物は全くなく、土塚の性格、時期ともに不明である。

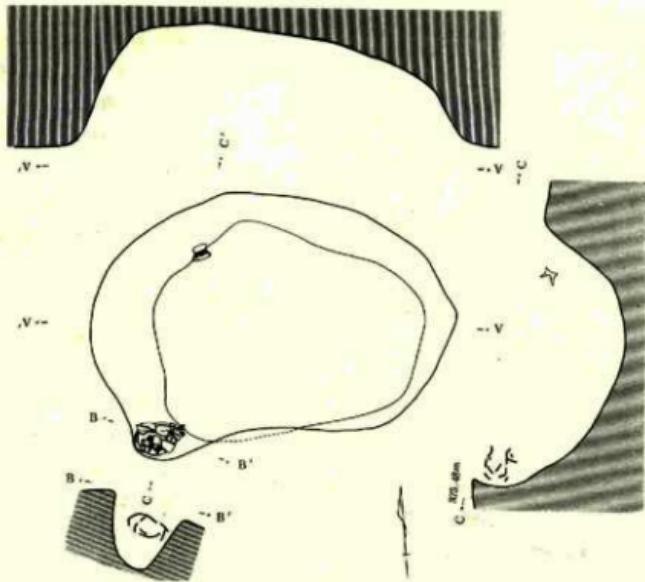
#### 4. 3号土塚(第9図)

1・2号土塚のすぐ北に位置する。不整の長椭円形を呈し、長径約2.4m、短径約1.1m、深さ約0.4mを計る。本土塚からも遺物は出土していないが、人頭大の礫が土塚底面よりやや浮いて何点か出土している。主軸はほぼ東西方向で、規模、形状ともに1号土塚に類似しており、1号土塚と同様に晩期の墓塚と考えられる。

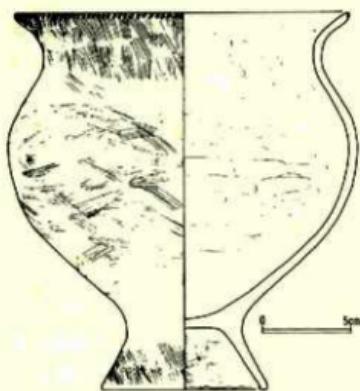
#### 5. 4号土塚(第10図)

1号住居址の東に位置し、2号集石と切りあっている。不整円形を呈し、長径2m、短径1.3m、深さ0.6mを計る。本土塚も黄褐色砂質土層に掘り込まれたもので、壁、底面とも自然礫がみられた。図示しなかったが、覆土は黒色土で、壁際には、崩れ落ちた黄褐色土のブロックがみられる。本遺跡で確認された他の土塚に比べ、地山への掘り込みの深い土塚

である。主軸はほぼ東西方向と思われる。本土塚からは台付甕と網文式土器片が出土(第11図・第12図)している。台付甕は、覆土上層から胴部と台部とが約1.1mの距離をおいて出土した。



第10図 4号土塚

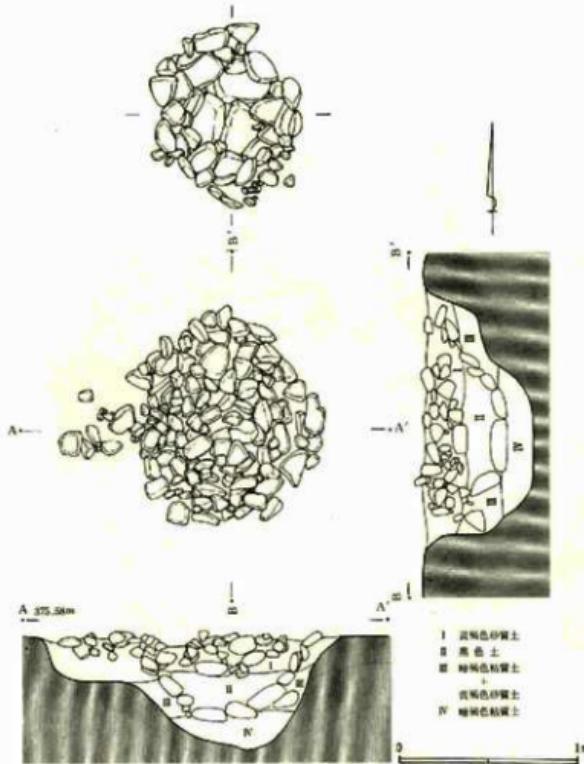


第11図 4号土塚出土台付壺



第12図 4号土塚出土土器

黄褐色を呈し、胎土には白色小砂粒をわずかに含む。口唇には刻目が施され、口縁および台部には縦方向の、胴部には横方向の刷毛目がみられる。また、台部内面にも横方向の刷毛目が残る。口縁から胴部にかけての内面には、ヘラによる横ナデがなされている。弥生時代後期後半から終末に位置づけられよう。第12図に示した土器は、磨消織文、沈線文、条痕文などが施されており、本遺跡の遺構、グリッド出土の土器と同じく、清水天王山式に伴出する晩期前半の土器群である。この資料も覆土からの出土であり、土塚の時期、性格などを特定することは困難であるが、おそらく晩期に位置づけられるものであろう。



第13図 1号集石

### 6. 1号集石

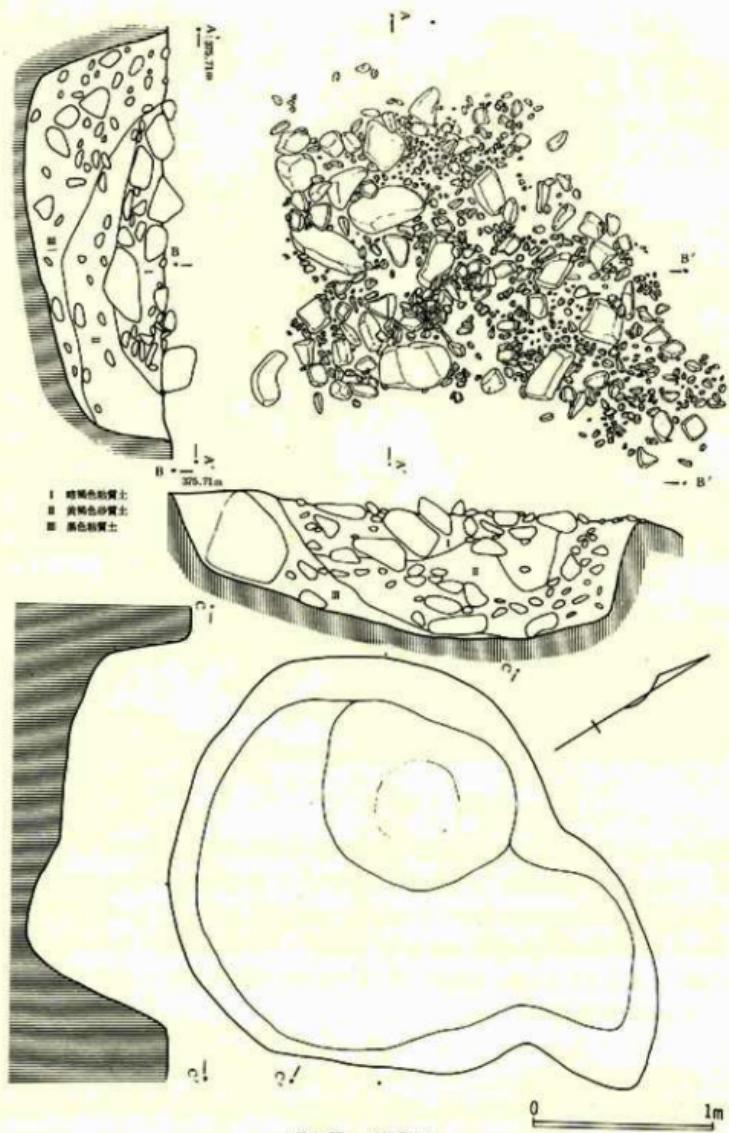
(第13図)

1号溝に切られた集石土塙で、円形を呈し、径約1.2m、深さ0.6mを計る。本土塙は掘り込み部分に平石を敷きつめ、その上に礫を入れて構築されたものである。上部の礫は拳大から人頭大のもので、隙間なく充填されている。この礫の下には炭化物を多く含んだ土が10~20cmほど堆積し、さらにその下から壁面にかけて平石(20cm程度)を敷きつめている。平石下には、荒掘りの土塙底面に敷くように暗褐色粘質土が入れられていた。つまり、

他の土塙にみられるような、底面、壁面の自然礫が本土塙ではみられない状態になっている。敷きつめられた平石には、激しく火熱を受けた痕跡ではなく、焼土もみられなかった。したがって、土壇内の炭化物を主体とする層は、平石を敷きつめたのち入れられたものと考えられる。本集石からは、上部集石端から関山式土器片(第23図3)が1点出土しているにすぎない。集石上端から出土しているため、本集石に伴うものであるか確定できない。特殊な土塙であるが、その性格も不明である。

### 7. 2号集石 (第14図)

1号住居址の東、4号土塙と切りあって確認された。1号集石と違い、内部には何の施設も確認されなかった。不整円形を呈し、長径約2.9m、短径約2.3m、深さ0.8mを計る。本集石も地



第14図 2号集石

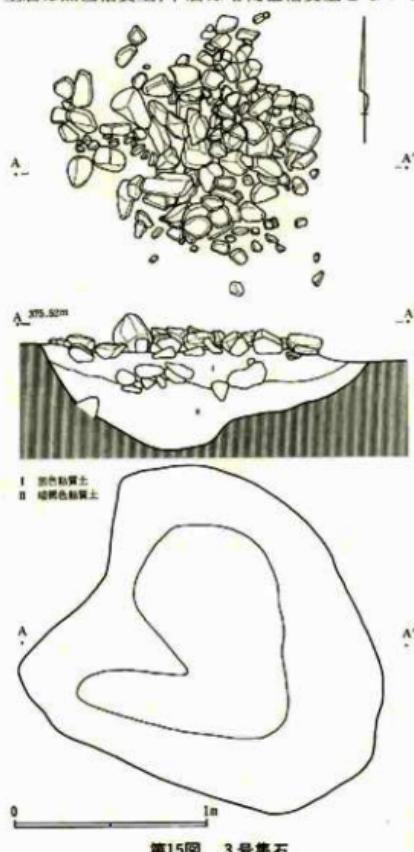
山を掘り込んだもので、底面、壁面とともに自然礫がみられる。覆土中にも多量の礫がみられるが、覆土が黒色や暗褐色の粘質土であるため、掘り込みが確認できた。覆土中の礫は大小さまざまであり、図示しなかったが、とくにⅠ層中には小円礫が多量にみられた。本集石からは遺物の出土が全くななく、4号土壙との切り合い関係も不明瞭であったため、時期、性格など不明である。

### 8. 3号集石（第15図）

1号住居址の西に位置する。不整円形を呈し、長径1.7m、短径1.5m、深さ約0.5mを計る。本集石の覆土は、大きく上下二層に分かれる。上層は黒色粘質土、下層は暗褐色粘質土となっている。集石はほとんど上層上面に集中しているが、断面図にみられるように、上層と下層の境にも存在する。これらの礫は拳大から人頭大のものが多い。本集石は地山を掘り込んで構築されているが、暗褐色粘質土を入れ、礫を敷き、黒色粘質土を入れたのち、表面に礫を敷きつめている。最下の暗褐色粘質土により、地山に掘り込まれているものの、底面、壁面の自然礫は隠されている。この構築方法は1号集石と同様である。ただ、本集石も出土遺物は全くななく、時期、性格など不明である。

### 9. 2号溝（第16図）

調査区西端から1号住居址南にかけて確認された溝である。最大幅約4m、最小幅約2.5m、深さ約0.3mを計る。西端部は農道建設時に削平されているが、西方に続くことは確実である。本溝は弧状を呈する溝であり、確認部分での内壁からの直径は15m程度と推定される。覆土は暗褐色粘質土であるが、溝内には図示したようにびとだしい礫がみられる。本溝からは、清水天王山式土器とともに須恵器が出土している（第17図・第18図）。



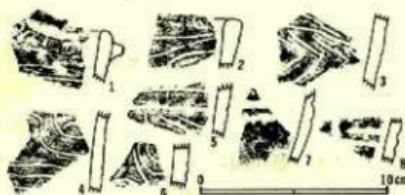
第15図 3号集石



第16図 2号溝



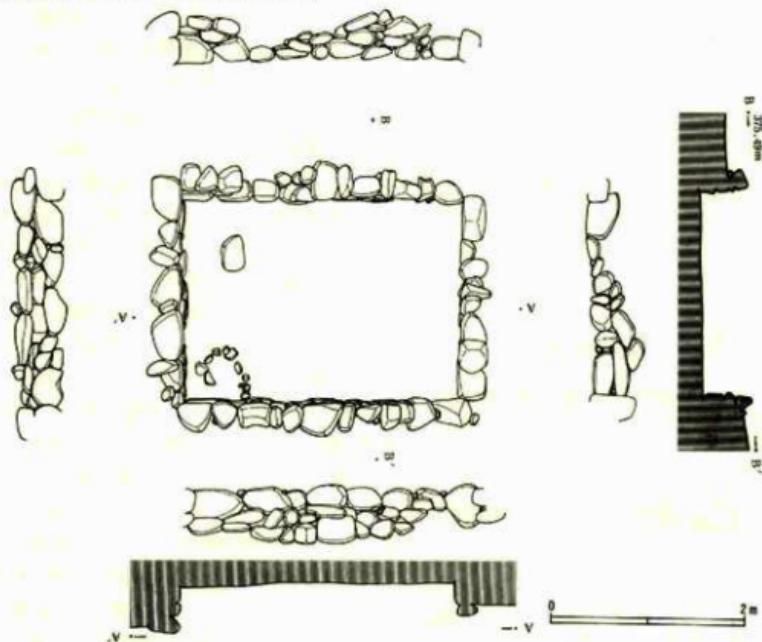
第17図 2号溝出土須恵器



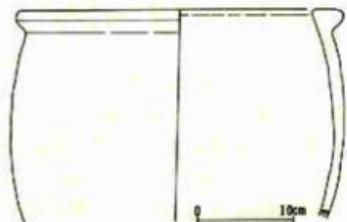
第18図 2号溝出土土器

須恵器は壺の上半部で、口径17.6cm、頸部径14.2cm、胸部最大径36.6cm、現存高18.5cmを計る。灰褐色を呈し、頸部から肩部にかけて自然軸がみられる。焼成は良好で胎土も精良である。胸部外面には縦方向の平行叩き目が施され、頸部内面にはヘラによる調整痕がみられる。胸部内面は横ナデ調整が丁寧であるが、肩部から頸部にかけての内面には粘土の積み上げ痕が残り、調整はやや雑である。口縁はやや内湾ぎみで受け口となっており、口縁形態から7世紀代ころに位置づけられよう。このような須恵器の出土や、周回する可能性があることから、本溝は浅いながらも古墳の周溝と考えられる。金川扇状地には多くの古墳が現存するが、金川流域の国分、金川原などには、とくに古墳が群集していたとされている。国分地内では数多くの古墳が耕作などで削平されており、「豆塚」もその一つである。このことは、「東八代郡誌」にも豆塚に

ついて「一宮村国分字堀米にあり。石室尚存す。周囲二十間許ありしが、十年前に開墾す。」と記されている。国分地内の古墳では、1973年に国分塚地一号墳が調査され、7世紀初頭に位置づけられている。他の古墳についても石室、形状などからほぼ同時代であることが予想され、本周溝出土の須恵器との年代差はない。本周溝も7世紀代ころに位置づけられるものであろう。また、調査区北西端には径1m以上の巨石が放置されていたが、あるいは「豆塚古墳」の石室に関係したものであるのかもしれない。



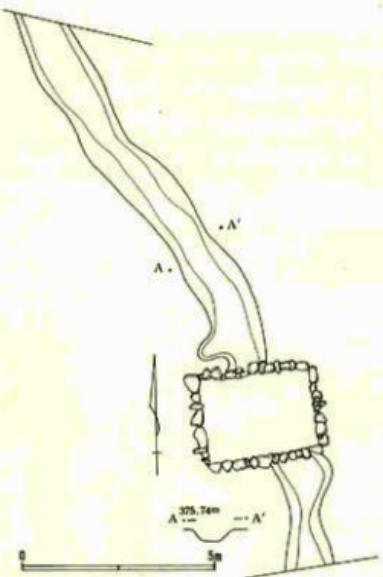
第19図 方形石組遺構



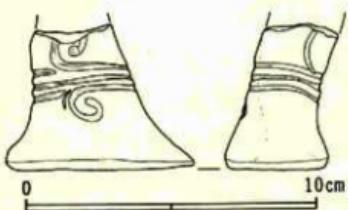
第20図 方形石組遺構出土臺

#### 10. 1号溝・方形石組遺構（第19図・第21図）

調査区東側に位置し、南から北西方向に続く溝が1号溝で、1号溝を切るかたちで方形石組遺構がある。方形石組遺構は長方形を呈し、石積み内法で、長辺2.9m、短辺2m、深さ0.5mを計る。本遺構確認時には20~30cm程度の礫が、底面から石積み上端までびっしりと積められていた。石積み内面は石の平面



第21図 1号溝・方形石組遺構



第22図 1号溝出土土偶

などが赤褐色を呈し、土器の胎土と変わらないのが普通である。本資料は、右足だけではあるが立体的であり、前述した胎土であることから、おそらく後期に位置づけられるものであろう。

1号溝と方形石組遺構とはセットとなることが予想されるが、その場合「水溜」と考えるのが妥当であろう。中世の水溜遺構としては勝沼氏館跡に好例がある。ここでは、床面の鉄分堆積が明瞭であり、入、出水溝も検出されている。しかし、本遺跡では前述したように鉄分堆積が認められず、内部に灰なども確認されているため、用途について明言は避けたい。また、その時期についても中世以降とだけ記しておく。なお、方形石組遺構内の充填された石の間からは他に数点の陶器片が出土している。

が向けられ、各辺とも直線をなしている。石積みは三段であり、隙間には小礫を嵌め込んでいる。1号溝との南側接辺（南辺）と北側接辺（北辺）部分は石積みが一段だけであり、溝とセットをなすものと考えられる。床面には鉄分の付着はみられず、南北西角付近には、小礫が集中し灰が確認された。1号溝は立地傾斜からすると、南から北西へ向かう溝であり、幅0.7~1.5m、深さ約0.3mを計る。方形石組遺構からは大型の壺破片（第20図）が、中に充填された礫の間から出土している。図は壺上半の一部を推定復元したものであるが、口径約33cm、現存高23cmを計る。口唇は平坦で非常に厚く、口縁部径と胴部最大径の差はあまりない。褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には砂粒が多くみられ、内外面とも横ナデ調整がなされている。なお、内外面とも表面剥離がみられるが、とくに外面に著しい。この形態の壺は、中、近世以降現代まで存在するもので、時期を特定できない。1号溝からは、数点の清水天王山式土器と土偶の右足が出土（第22図）している。表面は明黄褐色を呈するが、内面は黒色であり、白色小砂粒を多量に含む。三条の沈線が巡り、その上下段にはら旋状沈線が付く。清水天王山式に伴う土偶は、中谷遺跡にみられるような板状の土偶が多い。また、中期の土偶はほと

## 第IV章 遺物

### 1. 土器（第23図～第27図）

豆塚遺跡からは、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器が出土しているが、弥生式土器および須恵器については第III章で概観した。また、土師器についてはその出土量も少なく、すべて国分期の壺の小破片であり、図示しなかった。ここでは縄文時代の土器についてその概要を述べることにする。縄文式土器は、晩期の清水天王山式とそれに伴出するものがほとんどであるが、早期～後期の資料もわずかながら確認された。第23図～第27図および第5図～第7図に図示したものをおよそ時期ごとに分類していきたい。

#### 1群（第23図1・2）

楕円押型文土器である。1・2とも赤褐色を呈し、焼成は良好である。内面の磨きは雑で、胎土に砂粒を多く含む。楕円粒径は1が $6 \times 3$  mm, 2が $7 \times 4$  mmである。いずれも軸の横方向への回転によるものである。

#### 2群（第23図3）

前期前半に位置づけられるもので、1片だけの出土である。口縁の内湾する深鉢形土器の口縁部で、縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線と円形貼付文を施している。褐色を呈し、焼成は良好で、胎土には小砂粒を多く含んでいる。

#### 3群（第23図4～30）

前期後半に位置づけられるもので、これらは文様によりさらに4分類される。

##### 1類（4～6）

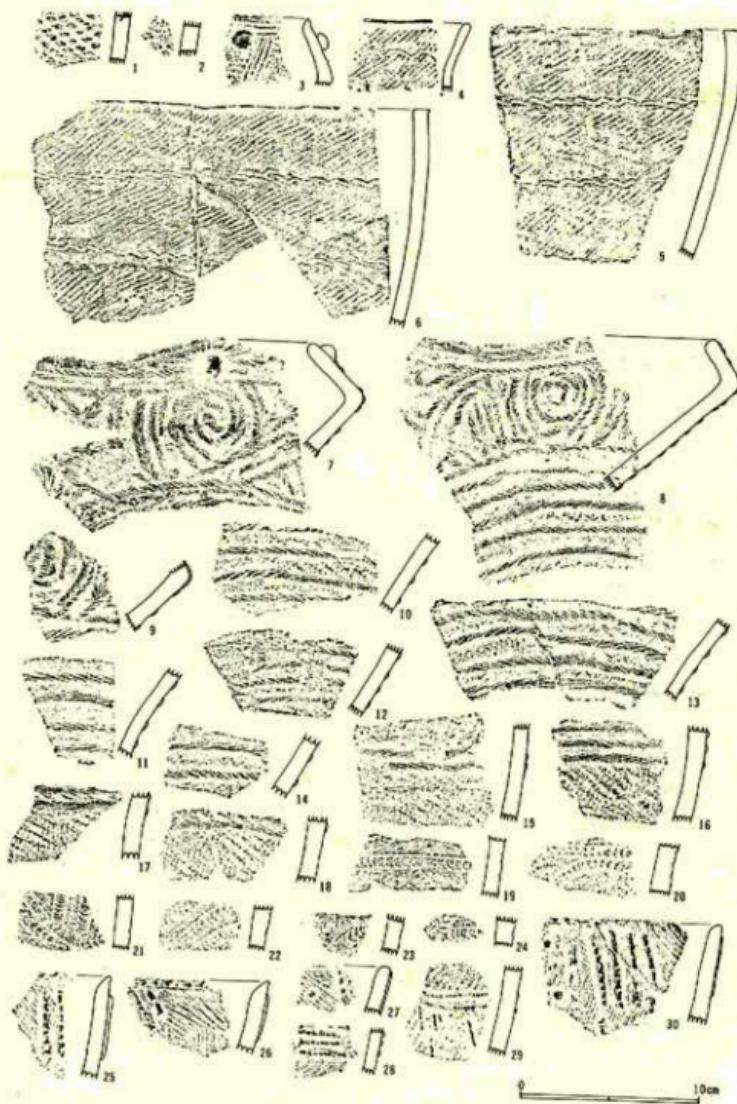
結節縄文の施される土器で、5・6は同一個体である。4は口縁のやや外反する深鉢で、暗褐色（内面明褐色）を呈し、焼成・磨きとも良好である。胎土には砂粒を含む。5・6は、黄暗褐色（内面赤褐色）を呈し、胎土・焼成・磨きとも非常に良好である。

##### 2類（7～18）

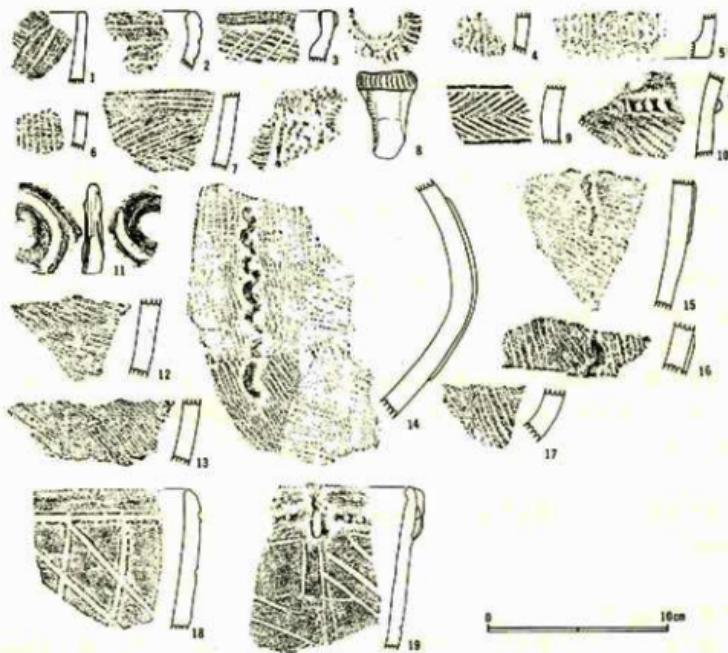
ヘラによる刻目をもつ浮線文の土器で、7～9, 11～13の6片は同一個体である。地文は縄文で、浮線を用いた直線・曲線文様が横帯に施文されている。浮線上の刻目は一段ごとに逆方向に施される。なお、横方向の直線浮文帶には、一段だけであるが竹管による円形刺突文がみられる。内湾する波状口縁の深鉢形土器で、赤褐色を呈し、焼成、内面の磨きとも良好である。胎土は精選されている。

##### 3類（19～24）

半截竹管による連続爪形文の施されるものを一括する。暗褐色、赤褐色を呈し、胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。これらは施文具である竹管の幅も同じで、同一個体と思われる。



第23図 グリッド出土土器(1)



第24図 グリッド出土土器(2)

れる。

#### 4類 (25~30)

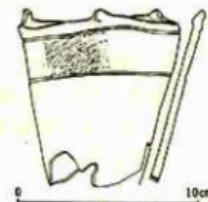
結節状浮線文の土器を一括するが、地文によりさらに細分される。

##### a (25~27・30)

地文に半截竹管による平行沈線が施されたもので、ボタン状貼付文の付くものもある。口縁形態から25・26・30は同一個体と思われる。暗褐色を呈し、磨き、焼成は良好である。胎土には砂粒が含まれるが、とくに雲母がめだつ。

##### b (28・29)

繩文を地文としたもので、29には結節状浮線文以外に、細い粘土紐の貼付がみられる。ともに褐色を呈するが、28は内面の磨きがきわめて丁寧で、a種の胎土にちかい。29は磨きが難で剥離もみられ、胎土の砂粒も非常に多い。



第25図 グリッド出土土器(3)

#### 4群（第24図1～9）

中期初頭の土器を一括する。これらは半截竹管による沈線文を主文様としているが、沈線の形状により細分される。

##### 1類（4・5・8）

山形連続文の施される土器である。4・5は同一個体の底部破片である。焼成は良好で、胎土には砂粒、とくに雲母がめだつ。8は把手破片であり、胎土は4・5に類似する。

##### 2類（3・6）

沈線を格子状に施したもので、3は整形、施文、調整とも非常に良好である。6は施文が浅く、砂粒とくに雲母がめだつ。

##### 3類（2・7・9）

平行沈線文の土器で、7・9は綾杉状沈線をもつ。7の施文は前期末にも類似したもののがみられるが、前期末に比べ、整形が難で、雲母が多い。2は焼成も不良で、胎土には砂粒も多く含まれる。

##### 4類（1）

弧状沈線を格子状に施したもので、暗赤褐色を呈し、磨き、焼成は良好である。胎土には砂粒が多い。

#### 5群（第24図10）

中期中葉に位置づけられるもので、地文に縄文を施し、幅広の隆線を貼付して刻みを入れている。胎土に砂粒を含むが、磨き、焼成とも良好である。

#### 6群（第24図12～17）

中期後葉に位置づけられるもので、すべて同一個体と思われる。縦横に撚糸文を施して地文とし、粘土紐を蛇行貼付し懸垂文としている。赤褐色を呈し、磨き、焼成とも良好である。胎土には砂粒が多く含まれる。

#### 7群（第24図11・18・19、第27図7）

後期前半に位置づけられるものを一括する。文様により細分される。

##### 1類（18）

口縁下に一条の沈線をめぐらし、その下に格子状沈線を施したもので、施文は深くしっかりしている。焼成は良好であるが、磨きは難で、砂粒を多く含む。

##### 2類（11）

把手あるいは口縁突起の破片で、非常に薄手である。表裏とも弧状沈線がみられる。赤褐色を呈し、胎土、焼成、磨きとも良好である。

### 3類（19,第27図7）

口縁下に刻目のある隆帯を巡らした土器である。19は口縁に「8」字文がみられ、胴部は平行沈線による区画がなされている。第27図7は、やはり平行沈線による区画がなされるが、平行沈線内部を擦りの細かい繩文で充填している。

### 8群（第25図）

後期後半に位置づけられるもので、ほぼ完形で出土した。口唇に3つの小突起をもち、口縁部には二条の沈線を施し、その間に擦りの細かい繩文を充填している。暗褐色を呈し、焼成、磨きとも良好である。

### 9群（第5図,第26図）

晩期前半の清水天王山式土器を一括する。ここでは、口縁部文様帶の中で本群の指標となる入組文と弧線文、三叉文の状態、組み合わせによって細分する。なお、資料が小破片のため、組み合わせなど判別不可能なものは分類からはずしてある。また、刻目突帯文の有無は、本来細分の対象となろうが、入組文の分類上判別できるものが少ないので、あえて細分はおこなわない。

#### 1類（第26図3）

対弧状沈線と縦の楕円形沈線の施されるもので、1片だけの出土である。本資料には刻目突帯が付く。

#### 2類（第5図3・6・7・9・21・22・24・25・32,第26図7～12・45～50・52）

巴状沈線文の施されるものを一括した。本類はすべて口縁が平線で、刻目突帯の付くものはみられない。第5図9,第26図8・9などには対弧状沈線が明瞭に残る。

#### 3類（第26図43・44）

2段の巴状入組文の一体化によるS字状文の施されたものである。いずれも胴部破片であり、口縁下の対弧状沈線の残り方は不明である。

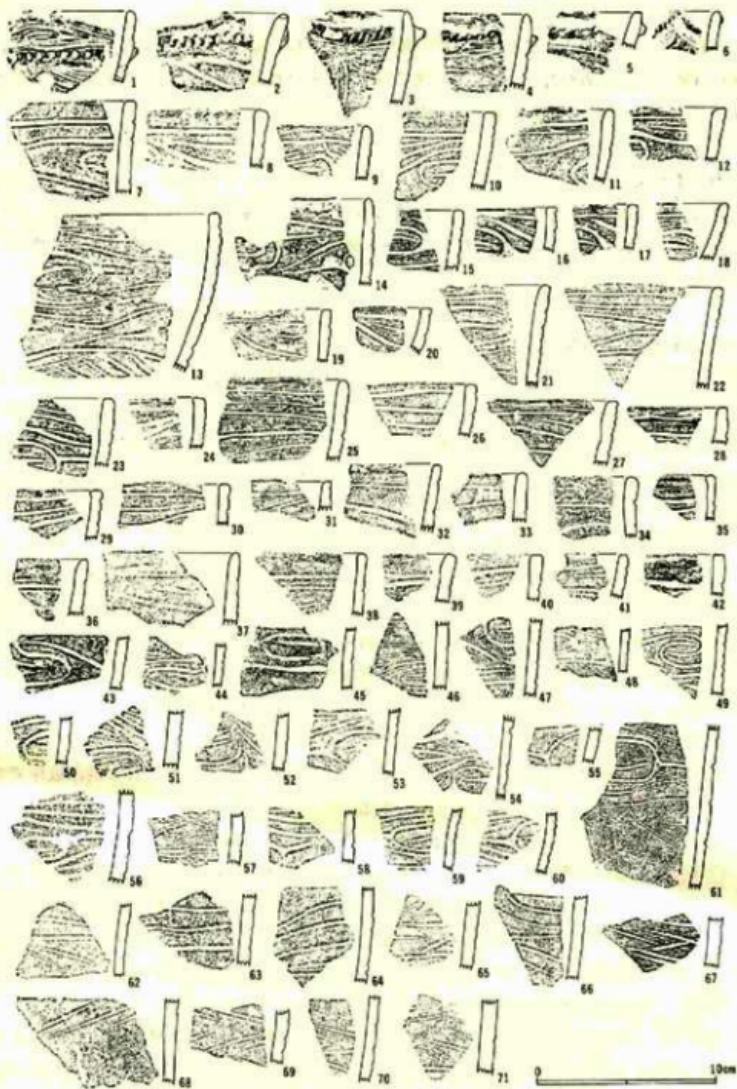
#### 4類（第5図1・16～19・34,第26図1・13～16・23・53～61）

巴状三叉入組文の施されたものを一括する。本類では巴状三叉入組文が二段以上施されるもの（第5図19,第26図13・14など）、沈線が流水状に連結したもの（第5図1,第26図13）など、1・2類にみられるような対弧状沈線はみられない。

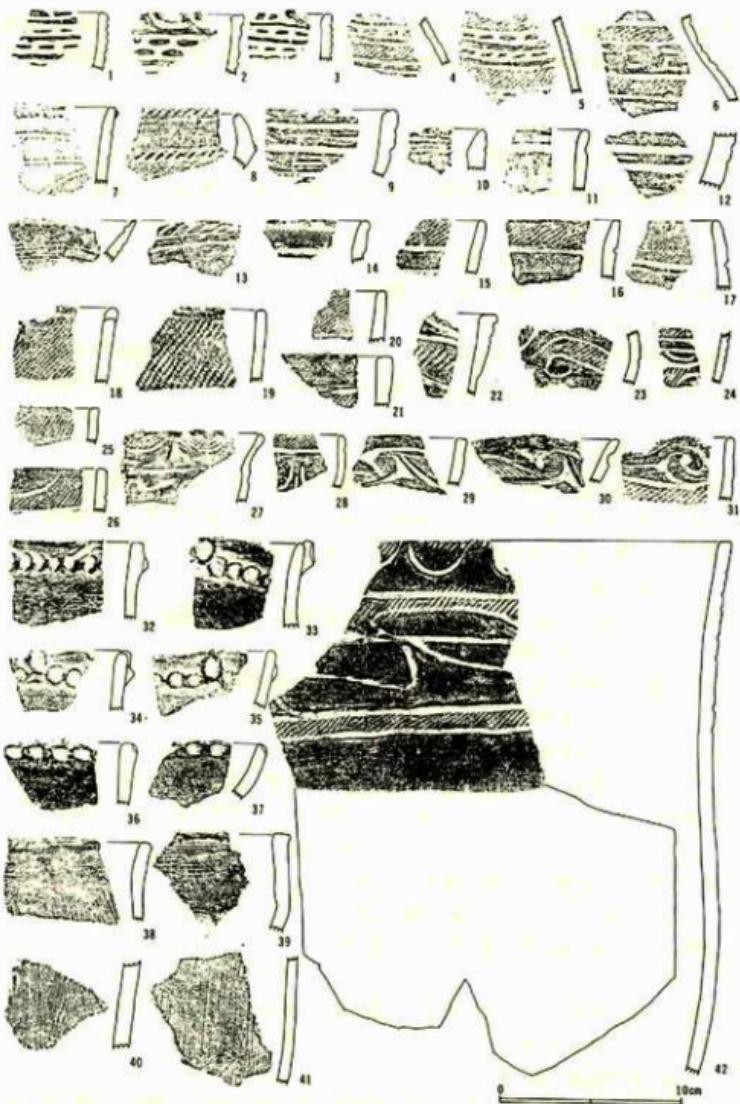
#### 5類（第5図2・5・11～15・20・23・26～28・30・35～43・45・46,第6図37,第26図2・4・19・20・22・24～42・63～65）

平行もしくは流水状の沈線文の施されるもので、1～4類の入組文を連結する「部分」である。流水状を呈するものは4類と考えられる。第26図2のように対弧状沈線と思われる部分もみられ、1類または2類に属するものとも考えられる。

#### 6類（第5図29・33・44・47～53,第26図62・66～71）



第26図 グリッド出土土器(4)



第27図 グリッド出土土器(5)

胸部にみられる綾杉文の施されたものを一括する。清水天王山式土器では古段階から新段階まで通して胸部に綾杉文が施されるため、本類も1～4類までのすべての可能性があり判別不可能である。

#### 10群（第6図・第7図・第27図）

9群土器に伴出する晩期前半の土器群を一括して本群とする。文様などから12類に細分される。

##### 1類（第6図3, 第27図1～5・27）

大洞系土器を一括する。施文により二分類される。

###### a（第27図27）

精製土器で、口縁部に弧状沈線を巡らし、内部を繩文でうめ、弧と弧の間際に三叉文を施すものである。口唇にこぶ状突起を有し、頭部でやや屈曲する。本群の中でも古く位置づけられよう。

###### b（第6図3, 第27図1～5）

羊齒状沈線文を施すものである。浅鉢（第27図1～3）と壺（4・5）は器壁が薄く、器面に光沢のある精製土器である。注口部破片（第6図3）は明褐色を呈し、磨きも難で、東北地方からの搬入品とは思われない。おそらく当地で作られたものであろう。

##### 2類（第6図15・17, 第27図29～31）

磨消繩文と三叉文を施すものである。三叉文の状態により二分類される。

###### a（第6図17, 第27図31）

波状口縁で、玉抱き三叉文を施したもので、三叉文下に磨消繩文をもつ。

###### b（第6図15, 第27図29・30）

磨消繩文と三叉文が組合文化したものである。

##### 3類（第6図18・19・23～30・32・33, 第27図6・13・22・23）

磨消繩文を主文様としたもので、沈線区画の状態により二分類される。

###### a（第6図18・19・24～26・28・32・33, 第27図6・13）

平行沈線による直線区画の磨消繩文土器である。

###### b（第6図23・27・29・30, 第27図22・23）

沈線による曲線区画の磨消繩文をもつ土器である。

##### 4類（第27図14～21）

口縁部に繩文帯をもつものを一括する。繩文帯下に横走する沈線をもつもの、口唇にこぶ状突起をもつものなどがある。

##### 5類（第27図25・26・28・42）

口縁に弧状沈線文と磨消繩文をもつものである。25・26・42は同一個体で、胸上半の平行する磨消繩文帯の間に沈線を施している。

#### 6類（第6図14・20）

磨消繩文と工字文をもつものである。黒褐色を呈し、光沢のある精製土器で、胎土・焼成とも非常に良好である。外面に赤色顔料が残存している。本群の土器中で最も新らしい時期に位置づけられる可能性がある。

#### 7類（第6図1・2・4, 第27図9～12）

太目の沈線文が施された土器である。

#### 8類（第27図8）

口唇および口縁下の屈曲部に、ヘラ状工具による刻目を施したものである。屈曲部下には細かい繩文が施される。焼成、磨き、胎土とも非常に良好である。

#### 9類（第6図5～10・34・35, 第27図38～41）

条痕文土器を一括する。口縁部は横方向の、胴部は縱ないし斜行条痕文を施すものが多い。施文具は貝殻（第6図34, 35）、櫛状工具（第6図5～9）、ハケ状工具（第6図10, 第27図40・41）などがあげられる。

#### 10類（第6図11～13, 第27図32～35）

刻目突帯をもつものを一括する。口縁下に突帯をもつものは、一部が口唇にのびるようである。

#### 11類（第6図36, 第27図36・37）

口唇に刻目もしくは押圧痕を有するもので、第6図36は壺形、第27図36・37は深鉢形を呈する。黄暗褐色を呈し、磨きはやや雑である。

#### 12類（第6図38～59, 第7図1～5）

無文土器を一括する。器形に深鉢（42～49, 第7図1など）、浅鉢（58・59）、壺（39・54）があり、ミニチュア（38）もみられる。底部には網代痕（第7図2～5）がみられる。

以上のように本遺跡出土の繩文式土器を分類したが、1群は早期中葉、2群は開山式、3群1類は諸磯a～b式、2類・3類は諸磯b式、4類aは諸磯c式、同bは十三菩提式、4群は五領ヶ台式、5群は藤内式～井戸尻式、6群は曾利II～III式、7群1類は中期終末～称名寺式、同2類・3類は堀之内式、8群は加曾利B式、9群・10群は晚期前半に比定されよう。

押型文土器は、これまで県内では80か所ちから、発掘・採集されているが、ほとんどが山間の小台地などに立地したもので、今回、扇状地扇尖部に位置する本遺跡で確認されたことは興味深い。甲府盆地周辺には扇状地形が多くみられ、今後、これらから該期の遺跡が確認されることも期待されよう。

晚期前半の資料は、本遺跡において主体をなす土器群であるが、その総量は決して多いとは言えず、しかも小破片がほとんどである。清水天王山式についての変遷は、戸田哲也・奈良泰史両氏並びに小野正文らによって明らかにされてきている。とくに、中谷遺跡では豊富な資料が得られ、奈良氏による細分が行われている。まず小野は、清水天王山式土器に3段階の変遷

を試み、対弧状沈線とその間隙に施される楮円、もしくは平行沈線段階（＝第1段階：大洞B式併行）、対弧状沈線と巴状沈線の一体化による入組文段階（＝第2段階：大洞B—C式併行）、入組文の三叉文化段階（＝第3段階：大洞B—C式以降）と規定し、それぞれの時期比定をしている。戸田氏は二段階区分を示し、三叉文化段階を大洞B—C式、安行3b式併行に位置づけている。奈良氏は対弧状沈線とその間隙に施されるS字状、巴状沈線の土器に加え、弧状と巴状の沈線の一端が連結、入組化したものを第1段階（大洞B式、安行3a式併行）、弧状沈線と巴状沈線の一体化、三叉状入組文及びそれが二段にわたるもの、流水状沈線などの特徴をもつものを第2段階（大洞B—C式、安行3c式併行）、三叉文、三叉状入組文が連鎖状になるものを第3段階（大洞c1式、安行3c式併行）と規定している。内容を整理すると、奈良氏の第1段階には、小野の第1段階としたものが含まれていらず、対弧状沈線とその間隙に施されるものがS字状もしくは巴状沈線であるところから始まっている。また、弧状沈線と巴状沈線の連結がすでに第1段階からみられるとしている点、小野の第1、第2段階の捕え方と異なるものである。小野が清水天王山式土器の指標となる対弧状沈線、巴状沈線、三叉入組文などの要素を、弧状沈線と巴状沈線の連結、入組化段階、入組文の三叉文化段階という「推移」として捕えているのに対し、奈良氏はそれを大枠で認めながらも、各が異なった段階にもバラエティーとして存在するという考え方を示している。

本遺跡出土の清水天王山式土器（9群）には、1類：対弧状沈線の間隙に楮円形沈線文の施されるもの、2類：巴状沈線文の施されるもの（弧状沈線と巴状沈線が連結して入組化したものがほとんどと思われる）、4類：巴状三叉入組文の施されるものが認められる。伴出土器には、大洞系ではB式、B—C式、安行系では3a式、また、晩期前半と考えられる縄文系、条痕文系土器が認められ、一部に晩期中葉まで下る可能性のある土器が含まれている。1類土器は奈良氏の分類の範ちゅうには入っていないが、ここでも存在する。清水天王山式土器の変遷を想定したとき、本類はバラエティーとするより、やはり古い段階に位置づける方が妥当であろう。2類、4類土器については、2類から4類への推移は基本的に存在するのであろうが、すべてこの流れに納まるか、併存するものがあるかは、出土状態のよくない本資料をもとに論じることは控えたい。

## 2. 石器（第28図～第31図）

豆塚遺跡から169点の石器類が出土した。内訳は、石鏃49点、打製石斧39点、磨製石斧3点、石匙1点、スクレイパー1点、石錐1点、石皿1点、砥石3点、打製石斧の破片あるいは剥片59点、チャートの剥片9点、安山岩の剥片3点である。このうち縄文時代晩期前半の1号住居址より出土した石器類は、石鏃16点、打製石斧1点、磨製石斧1点、スクレイパー1点、石錐1点、打製石斧の破片あるいは剥片4点、安山岩剥片1点である。

### 1) 石鏃（第28図）

完形品17点、破損品32点が出土した。平基無茎鐵、凹基無茎鐵、尖基鐵、直剪鐵がある。

①平基無茎鐵（第28図1～3・23）両側縁が外湾するもの（1・2）、直線的なもの（3）、稜のあるもの（23）がある。個々にみると、1・2は先端がやや丸く厚手太型、3は均整のとれた二等辺三角形で小型。23はおそらく五角形を意図したものであろう。重量は1—1.32g、2—1.90g、3—0.16g、23—0.92g。全て黒曜石製である。1と23は受熱の痕跡がある。他に2点が出土した。1号住居址からは1と他に1点が出土した。

②凹基無茎鐵（第28図4～22）両側縁が外湾するもの（6～8、10）、直線的なもの（5・9・11～16・22）、内湾するもの（17・18・21）、鋸歯縁のもの（19・20）がある。基部の抉りは4・6・17のように弱いものから10のように身長の△ほどもあるものまである。4は、片面にのみ研磨面をもつ局部磨製鐵である。おそらく押型文土器に伴うものであろう。重量は4—0.15g、5—0.36g、6—0.83g、7—0.25g、8—0.90g、9—0.54g、10—0.46g、11—1.14g、12—0.83g、13—0.55g、14—0.59g、15—0.41g、16—0.77g、17—0.43g、18—0.40g、19—0.46g、20—1.44g、21—1.43g、22—1.44gである。4～10・12～17・19・22が黒曜石、18・20・21がチャート、11が安山岩である。他に19点が出土し、うち4点が鋸歯縁である。1号住居址からは4・9・11・13・15・17・18の他4点が出土した。

③尖基鐵（第28図25～28）大型品（25）と小型品（27・28）がある。重量は、25—7.59g、26—2.45g、27—2.10g、28—3.12gである。27が黒曜石製である以外は全てチャート製である。尖基鐵は4点のみである。1号住居址からは、26・27が出土した。

④直剪鐵（第28図24）雁股状の直剪鐵で、重量0.92g、チャート製。1号住居址内出土。

### 2) 打製石斧（第29図）

完形品10点、形態の明確な破損品29点の他、部位不明の破片あるいは剥片が59点出土した。短冊形、撥形、分銅形に分類できる。

①短冊形（第29図1～4）両側縁が直線的なもの（1・2）、中央や上方に最大幅をもつもの（3）、やや内湾するもの（4）がある。刃部形は、円刃（1・3）、直刃（2）、斜刃（4）がある。4は、刃部に磨耗痕がみられる。重量は、1—52.0g、2—79.1g、3—108.9g、4—126.3gである。片岩製の3以外は全て粘板岩製である。他に6点出土した。

②撥形（第29図5～9）両側縁が直線的なもの（5～9）がある。刃部形は、円刃のものがある。8は破損したものを再加工したものであるかもしれない。5・8の刃部に磨耗痕がみら

れる。重量は、5—162.4 g, 6—109.5 g, 7—129.2 g, 8—92.3 g である。片岩製の 6 以外は全て粘板岩製である。他に 15 点出土した。

③分銅形（第29図 9～12）刃部形は直刃（11）、斜刃（9・10・12）がみられる。大型品が目立つ。9は裏面刃部側とその反対側の正面にも磨耗痕がみられる。重量は、9—314.0 g, 10—261.2 g, 11—199.5 g, 12—284.6 g である。他に 6 点出土。12は、1号住居址出土の唯一の打製石斧である。

#### 3) 磨製石斧（第30図 4～6）

定角式と乳棒状の両者がある。4は、定角式磨製石斧の小型品で基部のみが残存する。頭部に研磨前の縞打痕を残す。蛇文岩製である。5は、定角式磨製石斧で刃部を欠く。頭部に研磨前の縞打痕を残し、研磨面がない。蛇文岩製。6は、乳棒状磨製石斧の基部と思われる。成形時の縞打痕が全面に残り、研磨はそれほど顕著でない。頭部に研磨前の剥離痕がみられる。玄武岩製。

#### 4) スクレイパー（第30図 1）

チャート剥片を利用した両面加工のスクレイパーの欠損品で刃部は外湾する。1号住居址出土。

#### 5) 石錐（第30図 3）

チャート剥片を利用したもの。錐部断面形は、三角形状を呈する。錐部、頭部とも表裏両面から調製加工されている。先端部には垂直方向に細長い剥離が入る。1号住居址出土。

#### 6) 石匙（第30図 2）

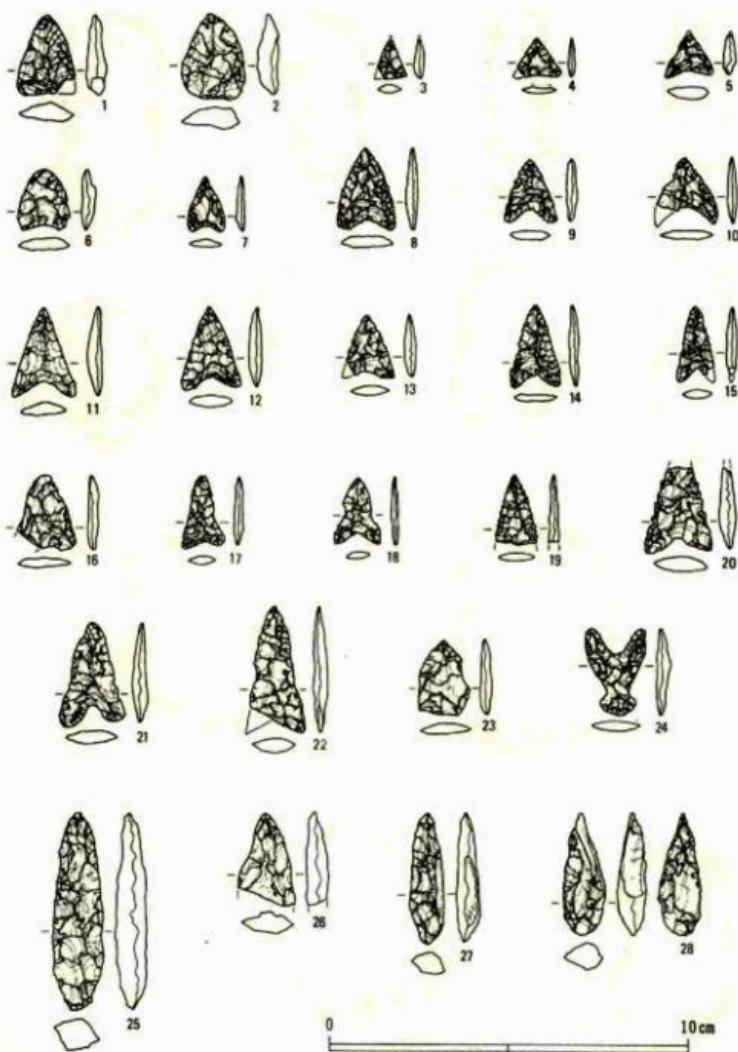
横型石匙である。調整加工は、つまみ部を形成した抉り込み部分に集中する。刃部には表裏とも加工がみられず、薄く、外湾している。片岩製である。

#### 7) 石皿（第31図 1）

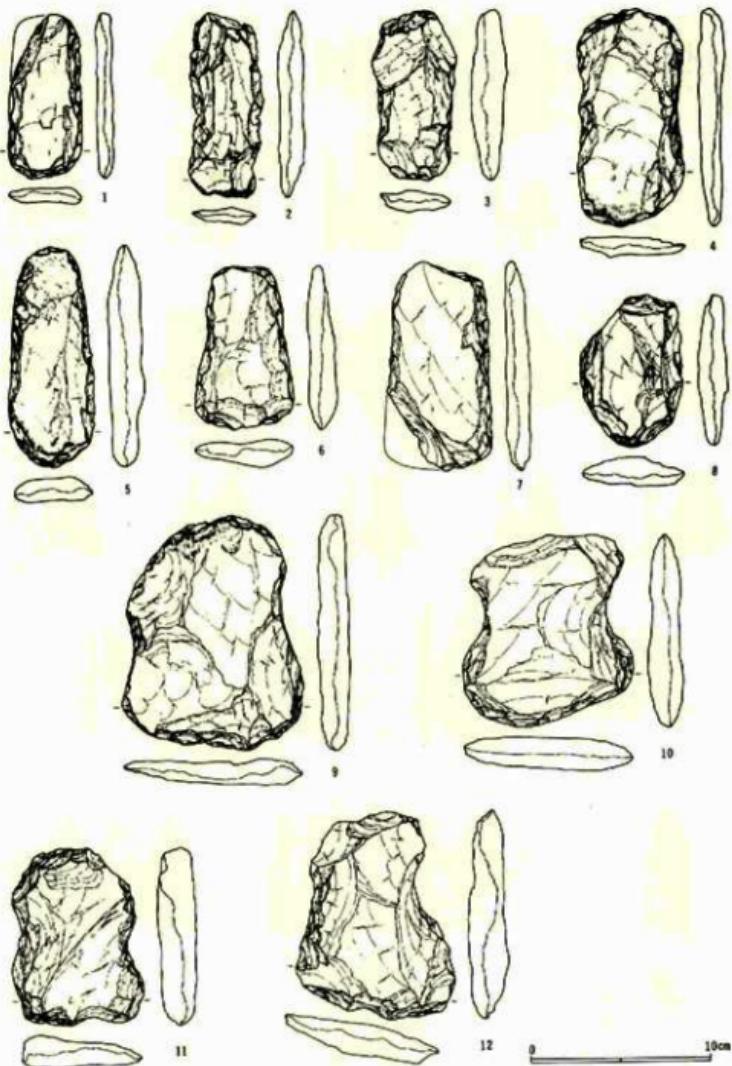
破損して何片かに分裂したものが接合したもので、同一個体ながら接合しない破片も 1 点ある。研磨面は中央部で平面形が U 字状に大きくくぼむ。掃き出し口と思われる開口部が最も深い。くぼみをかこむ縁部は、やや平坦となっている。裏面は表面同様にややくぼみ、開口部のみ研磨面がみられる。素材は、扁平な割り石と思われる。目の荒い砂岩製で非常にもらい。

#### 8) 砥石（第31図 2・3）

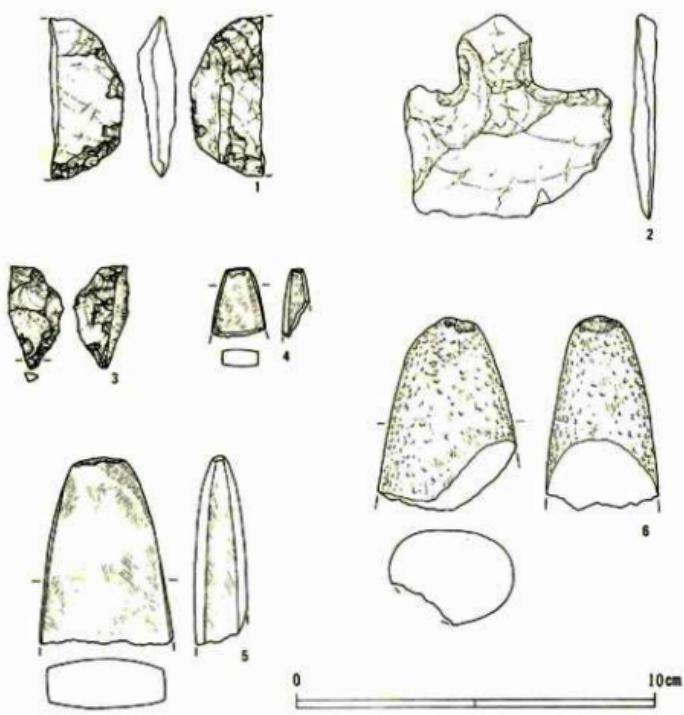
3 点の砥石が出土した。2は、五面の平面のうち四面が研磨されている。表裏の広い面と、左右の幅の狭い面とがあり、いずれもゆるやかな曲面となっている。図の上端は、素材の割れ面である。凝灰岩製。3は、七面の平面すべてが研磨されている。上面がくの字形に屈曲する。左右側面には、櫛状のもので引きかじったような跡がある。研磨以前のものであり、砥石素材の成形時のものかもしれない。凝灰岩製。もう 1 点は図示しなかったが、六面の平面のうち四面が研磨された扁平な砥石である。やはり凝灰岩製である。



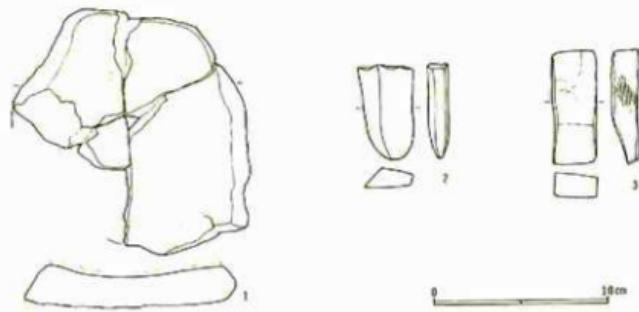
第28図 石器(1)



第29図 石器(2)



第30図 石器(3)



第31図 石器(4)

### 3. 土製品・石製品（第32図）

#### 1) 土製品（1～32・35～37）

土製品には、玦状耳飾、滑車形耳飾、土偶、動物形土製品があるが、35・36の土偶については前述したとおりであり、他の三種の要要を記す。

##### a. 现状耳飾（12）

半完形品1点だけの出土である。推定径2.7cm、幅1.3cmを計る。黄褐色を呈するが、赤色顔料が施されている。土製玦状耳飾は類例が少なく、本資料の出土状態も不明であるが、縄文時代前期に位置づけられるものであろう。

##### b. 滑車形耳飾（1～11・13～32）

総数31点が出土している。形態により大きく3分類される。

I : 環状を呈するもの（1～5・11・13～16）

II : 表裏面が平坦であるもの（7・8・22・23・26・31・32）

III : 表裏共またはどちらかが凹むもの（6・9・10・17～21・24・25・27～30）

これらはさらに穿孔、文様の有無、大小などにより細分されるであろうが、ここでは割愛する。Iグループは大小さまざま、有文は1だけである。大型のものは総じて磨き、焼成とも良好で、小型は11以外磨きが雑（2・3など）である。この傾向はIIグループにもみられる。32は小型であるが磨きが丁寧である。IIIグループでは大小にかかわらず磨き、焼成とも良好である。以上は、本遺跡から出土した耳飾の大まかな傾向である。なお、耳飾には、赤色顔料の塗布されたものが多くみられるが、本資料で顔料が残存するのは、4・19・20・21・30でIIIグループに多い。

##### c. 動物形土製品（37）

土偶様の動物形土製品であり、胴下半および両腕を欠損している。頭部は極めて抽象的でヘラ状工具および指頭によって三角形状の顔部をつくり出している。口、耳、鼻は省略され、刺突により、口部だけを表現したものである。この種の土製品は平安時代～中世にかけてみられるもので、本資料もこの時期に位置づけられるものであろう。なお、図示しなかったが、同様の土製品で、馬あるいは犬を表現したものと思われる（首、足、尾部欠損）も出土している。いずれも胎土は精選され、焼成も良好である。

#### 2) 石製品（33・34）

33は垂飾品の未製品である。先端部の研磨はきわめて丁寧であり、光沢がある。上半部は剥離が激しく、とくに上端は研磨前の状態となっている。歯牙製垂飾品を模したものと思われるが、本来あるべき穿孔はみられず、その部分は両面とも剥離しているため、あるいは穿孔段階に剥離が生じたため放棄したものかもしれない。白色を呈するが、中央部に黒色のシマがみられ、装飾効果をあげている。34は翡翠製の玉で、研磨・穿孔とも丁寧におこなわれている。



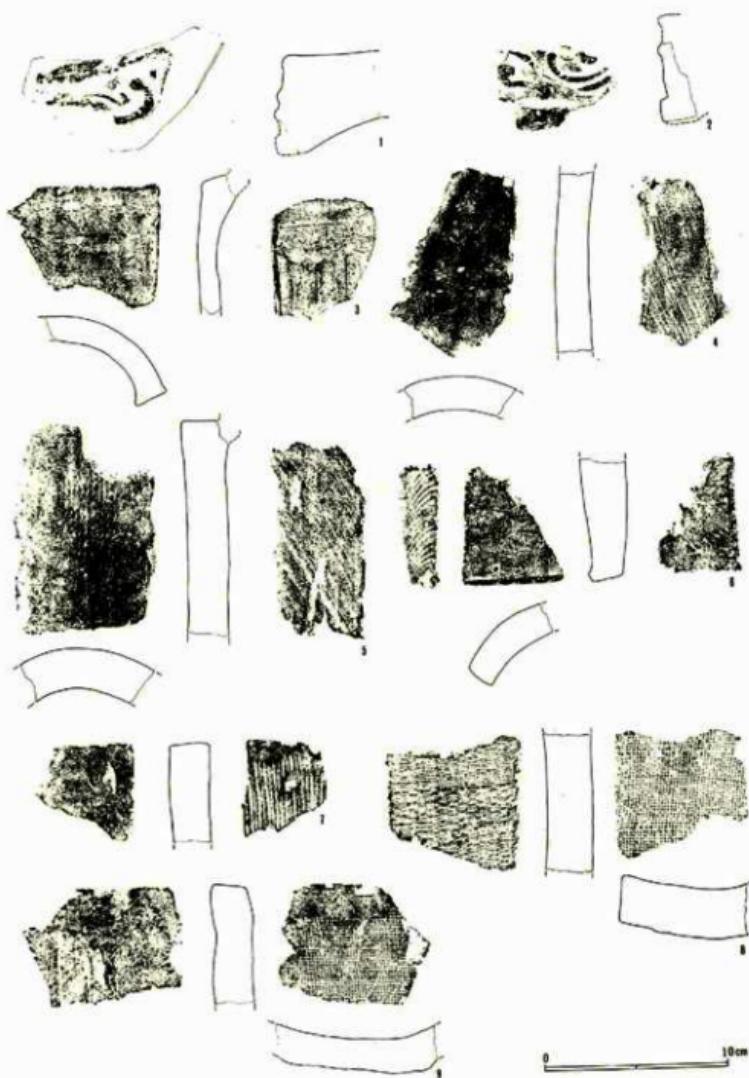
第32図 土製品・石製品

#### 4. 瓦（第33図）

調査区域内から瓦片が出土しているが、ここでは状態のよい9点の概要を記す。なお説明では瓦が屋根に葺かれた状態に基づき上・下面と呼ぶ。奈良～平安時代と推定される。

1. 宇瓦 単廓の周縁内に唐草文が配される。無頸形式のうち削顎を呈し、瓦当面の高さは約6cmを測る。灰色を呈し、粒子は細かく焼成も良好である。瓦上面はヘラによる横削り後、ナデによる整形がなされている。下面是ヘラによる削りの後、格子目の叩目がまばらに施されている。側面はヘラ削りによって面取りがされている丁寧な仕上げである。
2. 宇瓦 1と同じ文様の単廓で唐草文をもつが、1と比較して唐草文の隆線がやや細く、盛り上りも低い。胎土、焼成とも1と同一である。
3. 丸瓦 有段玉縁形の丸瓦片で、灰色を呈し焼成も堅固である。上面はナデ整形後継方向に細かな刷毛目痕がつけられ、下面是有段部内側から下へ指頭をそろえてなでつけている。側面は切削されたまま面取りは見られない。瓦の厚さは最も薄い部分で約1cmで、整形も難であるところから、国分寺使用瓦でも新しい時期の補修瓦であろう。
4. 丸瓦 下面には細布目痕が残る。上面はヘラ磨きである。灰色を呈し、1.5～1.8cmの厚さを測る。粒子は細かく焼成も良好である。
5. 丸瓦 有段玉縁形の丸瓦片で、下面には細布の文様が残っている。上面は繩の叩目がヘラ磨きによって若干磨り消されている。灰色を呈し、粒子は細かく、焼成は良好である。厚さ約2cmを測る。
6. 丸瓦 下面に布目痕があり、上面はヘラ磨きされている。下端上面は粘土がやや盛り上って丸い突帯を形成しているが、下面是ヘラ削りによる面取りがされ、側面には糸切りの切断面が残る。胎土に白色の大きな粒を含むが、赤色を呈し焼成良好で、厚さ2.4cmを測る。
7. 平瓦 上面は刷毛目が施され、下面是ヘラ磨きによる。厚さ2cm以上を測り、灰褐色を呈した焼成良好な瓦である。
8. 平瓦 上面は荒布目が残り、下面是疊表状のムシロ圧痕が施される。厚さ2.5cmを測り、胎土は細かく灰色を呈する。焼成は良好である。この種の瓦は特異である。
9. 平瓦 上面は荒布目が施されるが、下面是繩目叩目の後、砂粒が多く付着したために表面が荒れている。上面端部はヘラにより面取りされている。赤色を呈し、胎土に赤色粒子が含まれる。焼成は良好で厚さ2cmを測る。

以上、9点の概要を記したが、県下の瓦研究上貴重な資料が含まれている。1の格子目叩痕は敷島町天狗沢窯出土瓦や春日居町寺本魔寺出土瓦に見られるだけで、国分寺周辺では少ないものである。8の疊表状圧痕は県下では極めて珍らしい手法である。境川村室屋遺跡出土の平瓦はムシロ状の圧痕が施されたものであるが、これと技術的に関係があるかもしれない。9の平瓦に含まれる赤色粒子は、甲府市川田町あたりの粘土に含まれるもので、生産地を示唆する。



第33図 五

## 第V章 まとめ

今回の調査により、豆塚遺跡は縄文晩期を主体とした包含層であることが判明し、縄文時代・平安時代の集落は存在しなかった。また、古墳はかつて存在したが、耕作などによる削平のため、周溝だけが確認された。

遺跡付近は、甲斐国分僧寺・甲斐国分尼寺を中心として、奈良・平安時代の大集落が存在した地域である。一連の中央道の調査でも、国分、塩田地内では笠木本地蔵遺跡、北堀遺跡などが発掘され、古墳時代後期、奈良時代の住居址数軒と、平安時代全般を通じての数多くの住居址が確認された。近接の東新居遺跡も含めて、これらは遺跡名こそ違っているものの、その内容から包括された大集落とみなすことができる。また、過去の発掘調査、耕作中の遺物出土などからもこのことは想定されている。このような状況であるため、豆塚遺跡で該期の住居址が確認されなかつたことは予想外であった。調査対象域において、中央部に幅広の浅い谷が確認され、西側のわずかに残った微高地で縄文時代の遺構数基が検出されたにすぎない。集落は微高地に営まれることが多いが、調査対象域東側の微高地は笠木本地蔵遺跡に続くもので、こちらには集落の存在がはっきりしている。西側に残った微高地は、農道による削平分を考えても、すぐ西に金川が北流し、集落を形成するほどの幅がないことも推定される。

縄文時代の遺物は、出土総量こそ少ないものの、早期～晩期まで全般を通じて出土している。早期の押型文土器は、一宮町内では初めての出土であり、扁状地上の該期の存在を示した。また、押型文土器に伴うと考えられる局部磨製石鏽も確認された。県内では類例の報告はほとんどない。本資料のような極めて小型のものであれば、今まで見過ごされていた可能性もあり、同資料の再確認も必要となろう。前期では、諸儀a式併行と考えられる結節縄文土器や土製玦状耳飾など資料の増加が期待されるものである。

晩期前半の資料は、最近の発掘例により増加しつつあるものの、一部を除き断片的な資料にすぎない。本遺跡でも出土状態が悪く、資料の提示に留めざるを得ない状況である。清水天王山式土器は、中谷遺跡、尾咲原遺跡にみられるように、県東部の郡内地方で最近多く出土しており、質・量ともに本資料とは比較にならない。もちろん、遺存状態、発掘面積など、一概に比較できない条件はあるが、本遺跡の資料の貧弱さを感じざるを得ない。逆に、県北西部に位置する金生遺跡の清水天王山式土器は、量も少なく、胎土・磨きなど、本遺跡の資料との差は感じられず、むしろ、出土比率においては本遺跡が上まわっていると思われる。これらのことから、県内の清水天王山式土器は、分布のうえでもその内容においても県東部、郡内地方に中心をもつことは確かであろう。

## 参考文献

- ・『清水天王山遺跡』 清水市郷土研究会 1960
- ・『中谷・宮脇遺跡』 都留市教育委員会 1981
- ・『清水天王山式土器について』 小野正文 『丘陵』 1-3・4 1977
- ・『清水天王山式土器と晩期縄文土器の形成』 戸田哲也 『丘陵』 8 1980
- ・『甲斐の押型文土器』 小野正文・信藤祐仁 『丘陵』 6 1979
- ・『国分築地一号墳』 山梨県教育委員会 1974
- ・『縄文土器大成4・晩期』 講談社 1981
- ・『縄文文化の研究4・縄文土器II』 雄山閣 1981
- ・『日本先史土器』 山内清男 1967
- ・『山梨県の歴史』 磯貝正義・飯田文弥 1973
- ・『甲州風土記』 上野晴朗 1967
- ・『山梨県遺跡地名表』 山梨県教育委員会 1979
- ・『一宮町誌』 一宮町 1967
- ・『東八代郡誌』 山梨県教育会東八代支会 1914
- ・『山梨の遺跡』 山梨県考古学協会 1983
- ・『松原遺跡』 一宮町教育委員会 1983
- ・『一宮町国分寺周辺遺跡の調査—松原遺跡—』 猪股喜彦 『山梨考古』 10 1983
- ・『季刊考古学』 第5号 雄山閣 1983
- ・『縄文時代の植物食』 渡辺誠 雄山閣 1975

# 図 版

图版 1



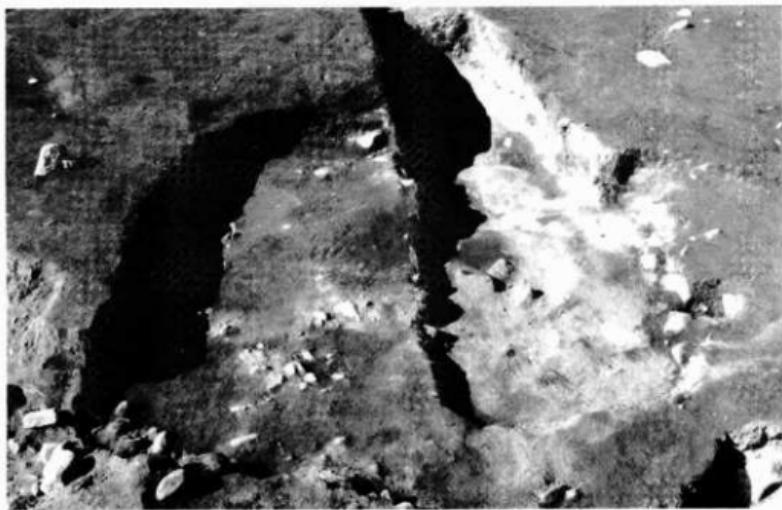
(1) 遗迹全景



(2) 遗迹全景

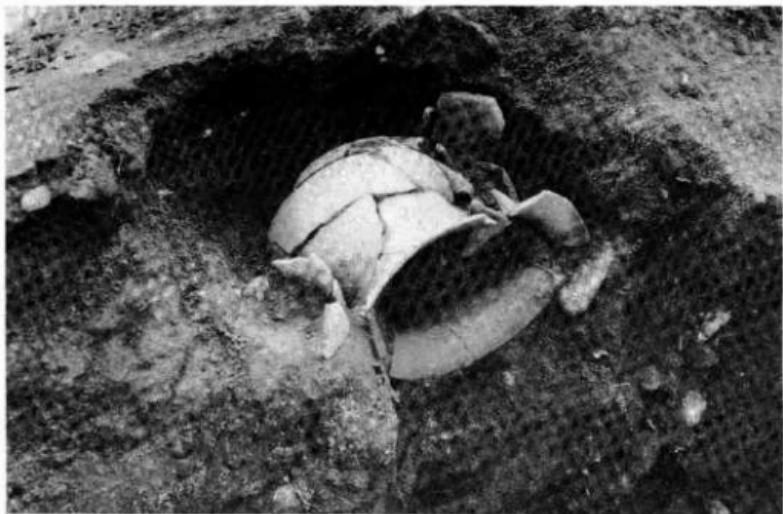


(1) 作業風景



(2) 1号住居址

图版 3



(1) 4号土塙台付窯出土状態



(2) 2号窯



(1) 1号集石（確認時）



(2) 1号集石（集石取りはずし後）

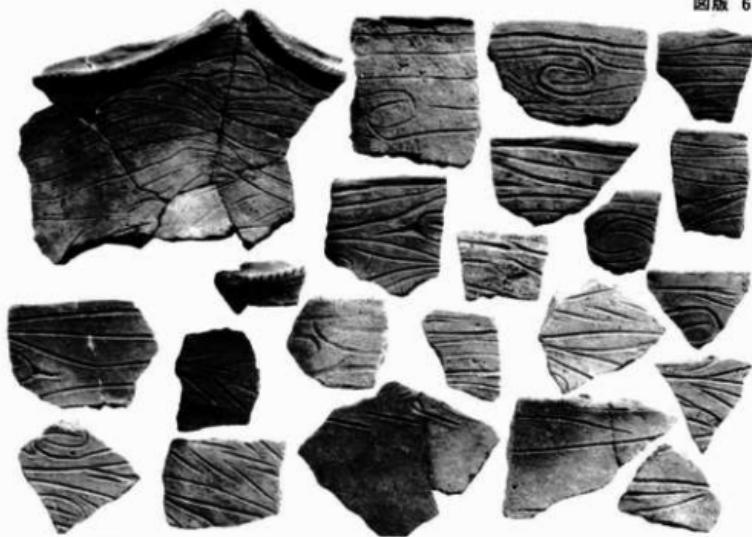
圖版 5



(1) 1号溝・方形石組遺構



(2) 方形石組遺構



(1) 1号住居址出土土器

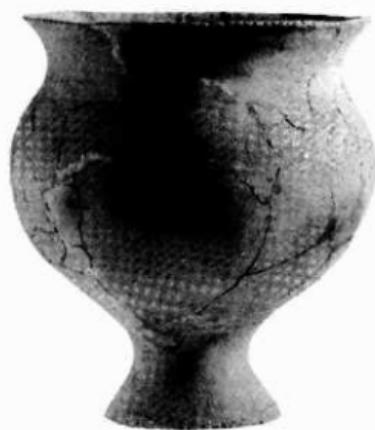


(2) 1号住居址出土土器

图版 7



(1) 4号土塚出土土器



(2) 4号土塚出土土器（台付壺）



(1) 2號溝出土須底器

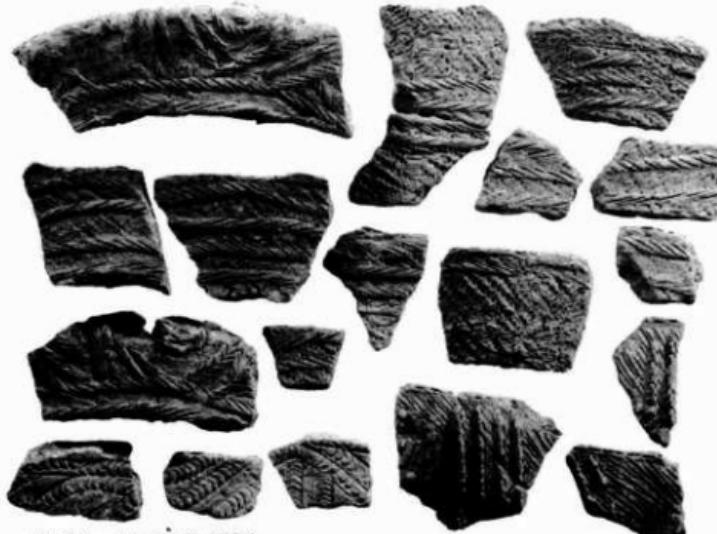


(2) 方形石組遺構出土土器

図版 9



(1) グリッド出土土器（早・前期）



(2) グリッド出土土器（前期）

図版 10



(1) グリッド出土土器（中・後期）



(2) グリッド出土土器（後期）

図版 11



(1) グリッピ出土土器 (晩期)

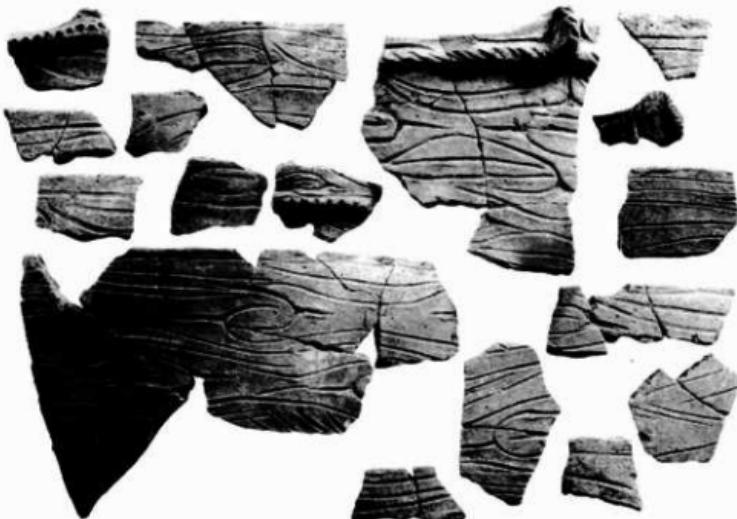


(2) グリッピ出土土器 (晩期)

図版 12

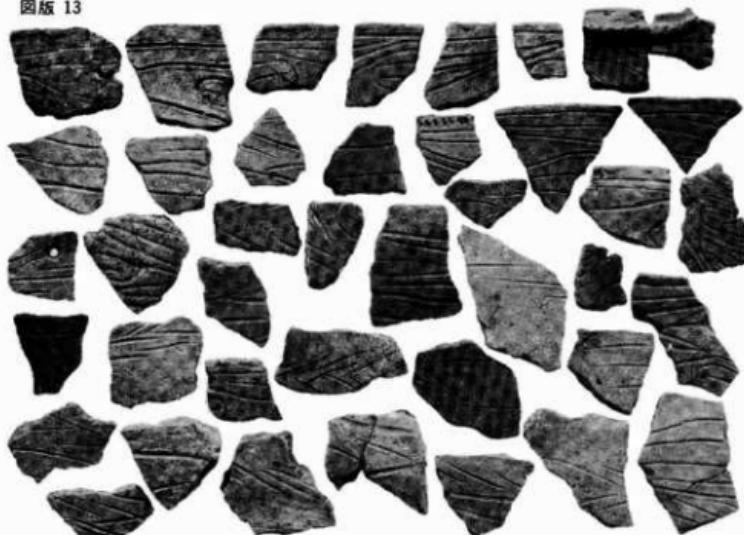


(1) グリッド出土土器（晩期）



(2) グリッド出土土器（晩期）

図版 13



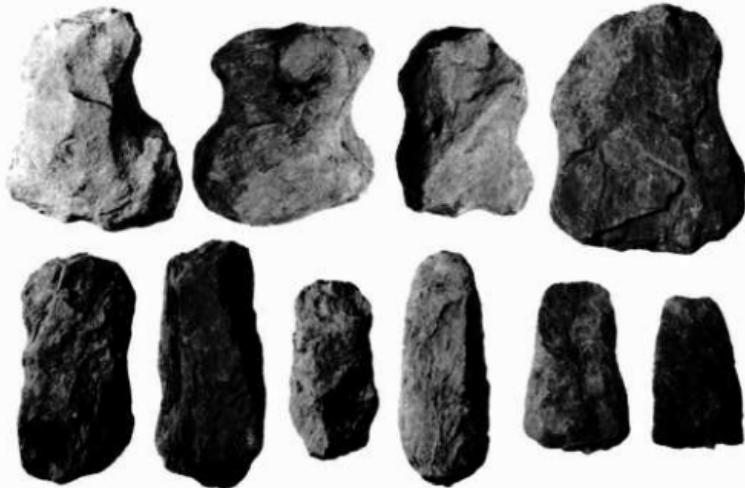
(1) グリッド出土土器（晚期）



(2) 土製品・石製品



(1) 石器 (石 镞)



(2) 石器 (打製石斧)

圖版 15



(1) 瓦 (表面)



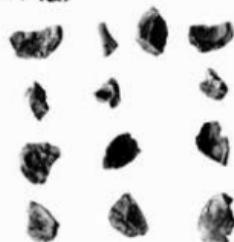
(2) 瓦 (裏面)



クヌギ(表)



クヌギ(裏)



クリ破片(表)



クリ(表)



クリ(裏)



クルミ(表)



クルミ(裏)

# 東新居遺跡

## 本文目次

第Ⅰ章 調査状況	41
第1節 発掘調査に至る経緯	
第2節 調査組織	
第Ⅱ章 遺跡の概況	41
第1節 遺跡の位置	
第2節 地理的環境	
第3節 歴史的環境	
第Ⅲ章 発掘調査	42
第1節 発掘調査の経過	
第2節 層序	
第3節 造構と遺物	
(1) 第1号住居址と出土遺物	
(2) 第2号住居址と出土遺物	
(3) 第3号住居址と出土遺物	
(4) 第4号住居址と出土遺物	
(5) 第5号住居址と出土遺物	
(6) 第6号住居址と出土遺物	
(7) 第7号住居址と出土遺物	
(8) 第8号住居址と出土遺物	
(9) 第9号住居址と出土遺物	
(10) 第10号住居址と出土遺物	
(11) 土塙	
(12) 造構外出土遺物	
第Ⅳ章 成果と課題	64
第1節 平安時代末期の豎穴住居址について	
第2節 平安時代末期の土器について	
(1) 土師質土器について	
(2) 灰釉陶器について	

## 挿 図 目 次

第 1 図	東新居遺跡位置図	42
第 2 図	層序図	43
第 3 図	東新居遺跡全体図	44
第 4 図	第 1 号住居址	45
第 5 図	第 1 号住居址出土遺物	46
第 6 図	第 2 号住居址	47
第 7 図	第 2 号住居址出土遺物	47
第 8 図	第 3 号住居址	48
第 9 図	第 3 号住居址カマド	48
第 10 図	第 3 号住居址出土遺物	49
第 11 図	第 4 号住居址	49
第 12 図	第 4 号住居址カマド	50
第 13 図	第 4 号住居址出土遺物	50
第 14 図	第 5 号住居址	51
第 15 図	第 5 号住居址カマド	51
第 16 図	第 5 号住居址出土遺物(1)	52
第 17 図	第 5 号住居址出土遺物(2)	52
第 18 図	第 6 号住居址	53
第 19 図	第 6 号住居址出土遺物	53
第 20 図	第 7 号住居址	54
第 21 図	第 7 号住居址出土遺物	54
第 22 図	第 8 号・第 10 号住居址	56
第 23 図	第 8 号住居址出土遺物	57
第 24 図	第 9 号住居址	57
第 25 図	第 9 号住居址カマド	58
第 26 図	第 9 号住居址出土遺物	58
第 27 図	第 10 号住居址出土遺物	59
第 28 図	土 坪	60
第 29 図	造構外出土遺物(1)	62
第 30 図	造構外出土遺物(2)	63
第 1 表	住居址内土器出土状況一覧表	67

## 図 版 目 次

図 版 1	(1) 遺跡全景	(2) 発掘風景
図 版 2	(1) 第1号住居址	(2) 第2号住居址
図 版 3	(1) 第2号住居址土器出土状況	(2) 第3号住居址
図 版 4	(1) 第3号住居址カマド	(2) 第4号住居址
図 版 5	(1) 第5号住居址	(2) 第5号住居址カマド
図 版 6	(1) 第6号住居址	(2) 第7号住居址
図 版 7	(1) 第7号住居址土器出土状況	(2) 第7号住居址土器出土状況
図 版 8	(1) 第8号住居址・第10号住居址	(2) 第9号住居址
図 版 9	(1) 第9号住居址カマド	(2) 第6号土塁
図 版 10	(1) 第5号土塁	(2) 第3号土塁
図 版 11	(1) 第1号住居址出土遺物	
図 版 12	(1) 第2号住居址出土遺物	
図 版 13	(1) 第3号住居址出土遺物	(2) 第4号住居址出土遺物
図 版 14	(1) 第5号住居址出土遺物	
図 版 15	(1) 第6号住居址出土遺物	(2) 第7号住居址出土遺物
図 版 16	(1) 第7号住居址出土遺物	(2) 第8号住居址出土遺物
図 版 17	(1) 第9号住居址出土遺物	
図 版 18	(1) 第10号住居址出土遺物	(2) 造構外出土遺物
図 版 19	(1) 造構外出土遺物	(2) 造構外出土遺物

## 第Ⅰ章 調査状況

### 第1節 発掘調査に至る経緯

- 1979年11月21日 文化庁に東新居遺跡の発掘通知を提出する。  
11月22日 日本道路公団と発掘調査の概算見積、工程について協議する。  
11月28日 日本道路公団より県教育委員会へ発掘調査委託契約の協議書が送付される。  
11月30日 東新居遺跡の発掘調査委託契約を締結する。  
12月3日 発掘調査を開始する。  
12月18日 文化庁より山梨県教育委員会へ発掘通知の受理通知書が送付される。  
1980年3月3日 発掘調査を終了する。なお調査終了後石和警察署へ発見通知を提出する。

### 第2節 調査組織

- 調査主体 山梨県教育委員会  
調査担当者 田代孝（県文化財主事）小野正文（県文化財主事）  
調査員 猪股喜彦（立正大学卒業生）  
作業員 田村長雄・前島益雄・金子 謙・渡辺達谷・田口裕男・三枝有朋・田中健一・  
広瀬ます子・村松とし子・今泉ちか子・村松和乃・田口雅子・田口かの・田口  
美智子・雨宮みどり・須田さゆり・坂野恭子・内山幸美・風間たけ子・田口幸  
江・古屋美智子・石原昭子・早川きくえ・早川君子・渡辺美代子・八代米子・  
山下のぶ子・野沢秋子・宇佐美延子・向山多津子・里吉とよの・村上はま子・  
里吉静子・里吉ゆきえ・橋口八郎・橋田いの子・土屋操子・橋田友子・横谷恵  
子・橋田茂子・横谷美代子・平山金代・橋口智恵子・土屋朝江・蒔田益子  
(順不同)

## 第Ⅱ章 遺跡の概況

### 第1節 遺跡の位置

山梨県東八代郡一宮町東新居字井之尻・東腰巻

### 第2節 地理的環境

東新居遺跡は、甲府盆地南東部に発達した扇状地の一つである大石川扇状地に立地する。大石川は、御坂山系の達沢山の西方山中より発し、大積寺の上方から北西に流れ、狐新居に出て土塚と東新居の間を北北西に流れ神沢に至り、一ノ宮の上で京戸川に合流する。全長約5.5kmあり、狐新居と東新居との間が最も傾斜が急である。遺跡は大石川の左岸で、標高約388m付近であり、東新居の集落の西端に位置している。現状は桃とブドウの樹園地となっている。

### 第3節 歴史的環境

一宮町地内に発達した合成功状地上には、先土器時代から縄文・弥生・古墳時代にかけて多くの遺跡が知られている（2頁『豆塚遺跡』の第Ⅱ章2.地理的環境を参照）。東新居・土塚の集落付近では、縄文時代前期・中期の遺跡分布が報告されている。さらに奈良・平安時代の律令政治の展開期にあって積極的な土地開発が進められると、その拠点となる集落が扇状地上にも成立したことが考えられる。東新居・土塚の集落周辺においても土師器・須恵器などの分布が見られる。東新居の集落は、近世初頭の『慶長古高帳』にその村名が記載されているが、村落の成立は中世までさかのぼることが推測されるのである。



第1図 東新居遺跡位置図

1  
25,000

## 第三章 発掘調査

### 第1節 発掘調査の経過

昭和54年（1979）12月3日、東新居遺跡の発掘調査に入る。遺跡はSTA559+40～STA560までをI区・STA560～STA560+80までをII区とし、STA560+40～+80を見通した線を基準線として用いた。調査区全体に4メートルグリットを設定する。

表土除去および遺構確認を行なう。I区C-3グリットにおいて、第Ⅲ層より縄文中期の土器片を検出する。遺構は不明。12月10日II区J-2・3グリットにかけて方形プランを確認する。住居址としてSB-01とする。以後12月25日までにII区L-3グリットでSB-02、I区L-22・23グリットでSB-03・04・05を検出する。

昭和55年（1980）1月11日発掘再開する。II区I-11グリットで縄文前期の土器片が出土。

II区K-10グリットで住居址プランを確認, SB-06とする。1月31日までにII区でSB-07・09さらにI区でSB-08・10を検出する。3月初旬発掘調査を終了する。なお2月17日遺跡報告会を実施する。

## 第2節 層序

東新居遺跡は、扁状地上にあり南から北に傾斜している。発掘区のI区・II区に各1本ずつの層序確認のため、南北20mのトレンチを設定する。2本とも大差のない層序であるところから、その一部を示して遺跡における基本層序の説明とする。

### II区I-11～K-11の土層

I 層 表土層, 砂混じり

IIa 層 暗褐色土層, 黄・白色細粒子を含み, 焼土粒子が少量混在する。IIb層よりも粘性弱く、さらさらしている。遺物の包含層である。

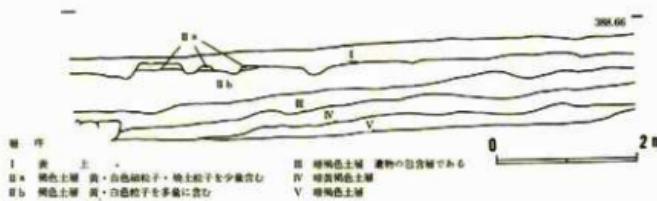
IIb 層 暗褐色土層, 黄・白色の細粒子(2～5mm)を多量に含み, 烧土粒子も若干混入する。IIa層よりも固くしまり、ブロック状に固まっている。遺物の包含層である。

III 層 暗褐色土層, 黄・白色の粒子を多量に含み, 烧土粒子が混入する。また, 若干であるが炭化物も混入する。粘性もあり固くしまる。遺物の包含層である。

IV 層 やや暗い黄褐色土層, 黄・白色粒子をさらに多量に含み, 粘性のある固くしまった土。

V 層 暗褐色土層, 黄・白色の粗粒子を多量に含み, 下層へいくに従い粗くなる。粘性は強。以下はバク石(花崗岩の風化)の層であり, 地山の層である。

遺構は、ほとんどIV層・V層に切りこまれている。なかにはIIbもしくはIII層にとどまるものもある。しかしこれらは表土層に近く、削平や搅乱を受け遺存状況はあまり良くない。さらに冬季の厳寒の環境では遺構確認がきわめて難航した。



第2図 層序図

1/2

STA560

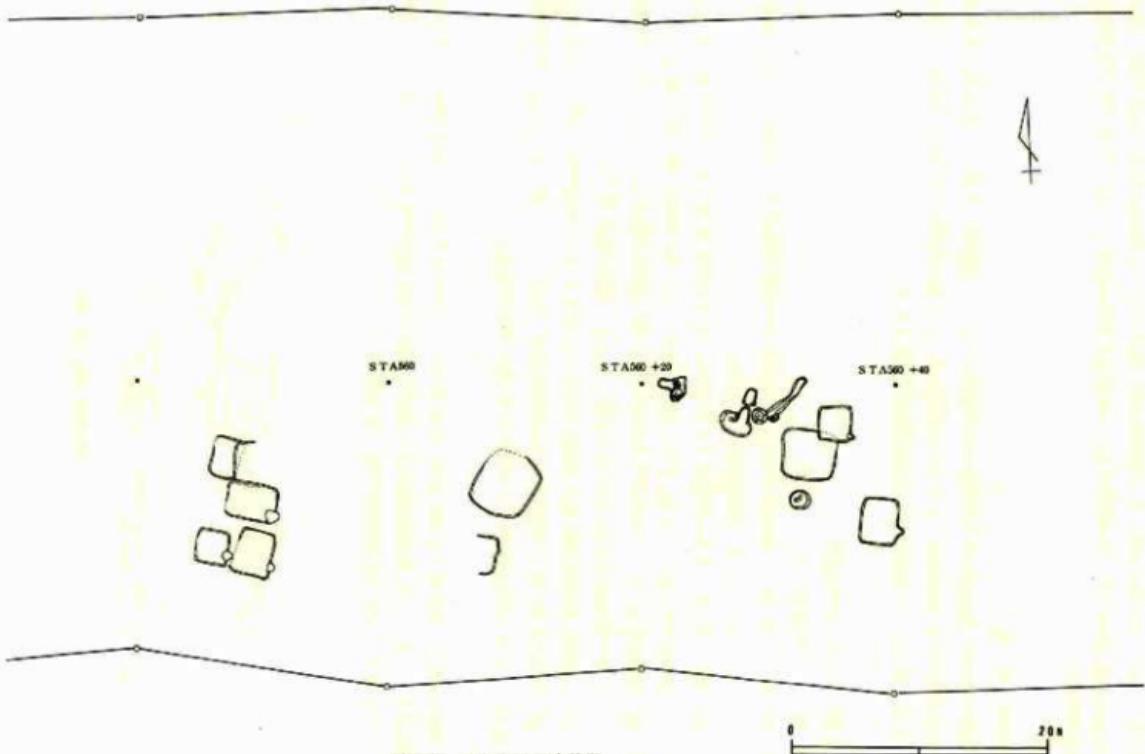
STA560 +20

STA560 +40

0

20m

第3図 東新居遺跡全体図

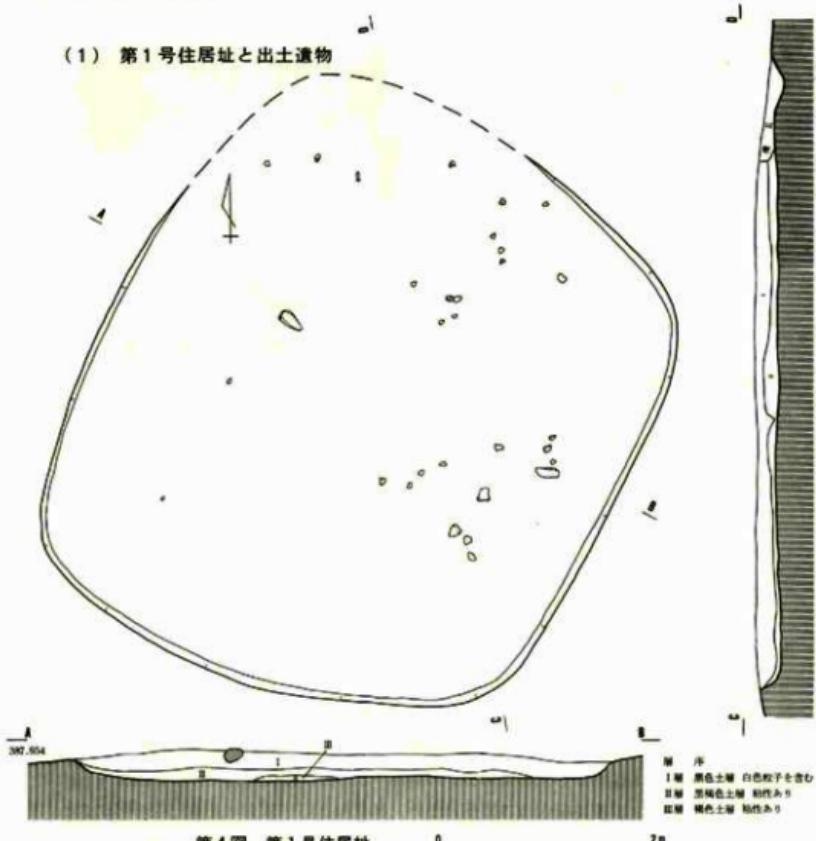


### 第3節 遺構と遺物

東新居遺跡は扇状地上に立地する。傾斜面は南から北に広がっており、発掘区は標高約388mほどのラインに沿うように東西にのびている。遺構は方形プランをもつ竪穴住居址と土塙であり、東西に長くのびた発掘区の南側に偏在した。

中央道STA560から西側をI区、東側をII区としたが、竪穴住居址を第1号から第10号(SB-01～SB-10)とした場合、I区で5軒(SB-03・SB-04・SB-05・SB-08・SB-10)、II区で5軒(SB-01・SB-02・SB-06・SB-07・SB-09)の合計10軒を検出している。土塙はII区のSB-07に近接して6基を検出しているが、石をともなうものと全くないものとがある。

(1) 第1号住居址と出土遺物



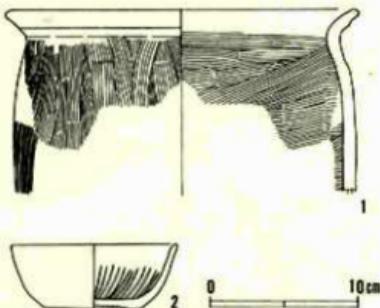
第4図 第1号住居址

### 第1号住居址（第4図）

II区J-2・3-K-2・3グリットにおいて検出された竪穴住居址である。長軸5.6m・短軸5.0mの隅丸方形である。長軸は北東の方向であり、この住居址のみが他の住居址と方位が異なっている。壁高はおよそ15cm～20cmを測ることができるが、住居址の北側の隅を中心とした一角が耕作などによる搅乱によって失われている。住居址内には焼土および炭化材が多量にみられたが、特に壁ぎわが顕著であった。床面はきわめて固く、一部は熱を受けて赤褐色に変色している。また一部の炭化材は床面直上に横たわっていた。これらのことから、第1号住居址は火災住居であったことが想定されるのである。柱穴およびカマドは確認できなかった。なお床面積が28m<sup>2</sup>であるが、これは本遺跡の住居址のうちもっとも広いものとなっている。

### 出土遺物（第5図）

本住居址内からは土器の小破片および炭化材が出土している。1は變形土器で長胴である。胴部の外縁は縦方向、内縁は横方向に刷毛目状工具による調整がある。なお外反した口縁部の内外とも横ナデが施されている。金雲母が多量に入り、赤褐色で焼成は良好である。2は壺形土器で内縁に暗文を施している。胴下半部からやや垂直に立ちあがる。赤褐色で焼成は良好。



### (2) 第2号住居址と出土遺物

#### 第2号住居址（第6図）

II区L-2・3グリットにかけて検出された竪穴住居址である。隣接する北側のK-2・3グリットには第1号住居址がある。東壁は南北に3.2mを測り、壁高は約15cmほどであるが、北壁は西へ1.3m、南壁も西へ0.8mの部分が残存するのみである。住居址の西半分は削平によって全く失われていたので、全体の形態を把握することはできないが、隅丸方形に近いものと推定される。なお東壁においてわずかに東に張り出す部分があり、カマドの位置と思われる。施設は不明であった。床面は遺物の集中する中央付近で固くしっかりしているが、壁ぎわはやや柔らかい状態であった。

#### 出土遺物（第7図）

本住居址の遺存状態の割には、出土土器が床面直上において多数検出されている。1は變形土器である。口縁部は強く外反する。外面は縦方向に刷毛目調整したのちナデ調整を施している。内縁は横ナデ調整がなされている。胎土は緻密であり石英、長石、金雲母の微粒子を含み、焼成は良好である。2は羽釜形土器である。口唇部下3.5cmの位置に厚さ0.8cm、幅2.5cmの鉗がめぐる。鉗の下部は炭素を吸収して器面は黒い。胎土は長石・雲母の小粒子を多量に含む。なお1と2は重なり出土している。3・4・5は壺形土器である。3は胴部が膨らみ、口縁部

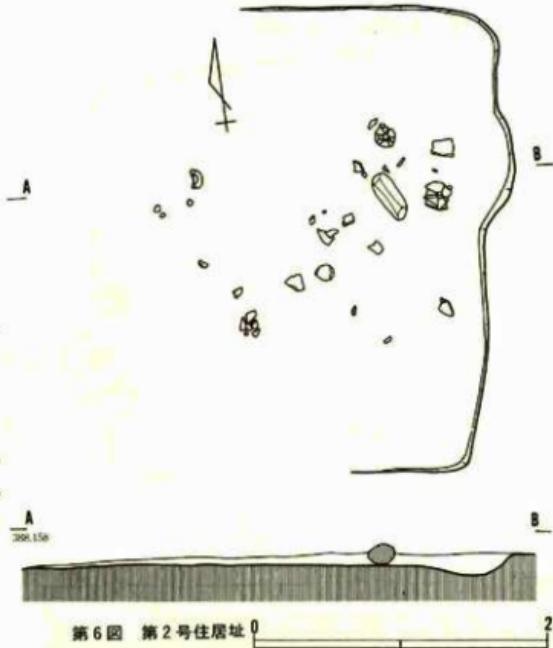
第5図 第1号住居址出土遺物

が外反する器形であり、口径9.5cm、底径5.2cm、高さ1.8cmである。横ナデ調整がされている。糸切り底である。

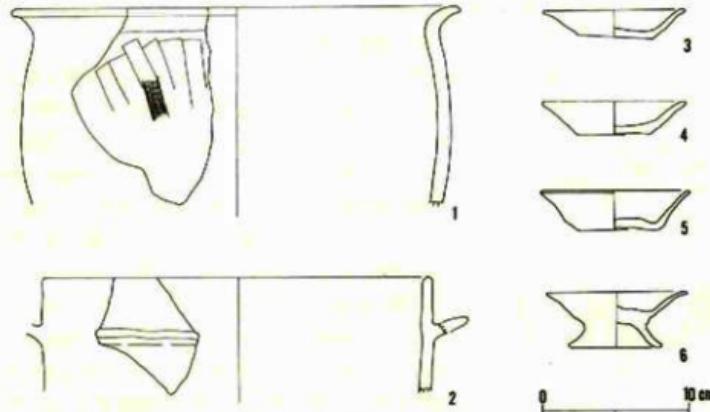
4は底部よりゆるやかに立ちあがり、口縁の反りはみられない。口径9.8cm、底径4.8cmである。横ナデが施され、糸切り底。胎土は緻密で、色調は茶褐色である。

5は口径12cm、底径5.4cm、器高2.7cmで、口縁部が外反する器形である。横ナデ調整があり、色調は黄褐色。

6は高台付環形土器である。口径9.6cm、底径6.4cm、器高3.8cmで、口縁部は外反する。横ナデ調整があり、色調は茶褐色である。

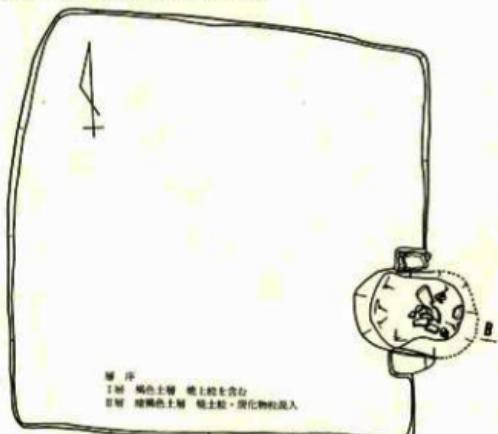


第6図 第2号住居址

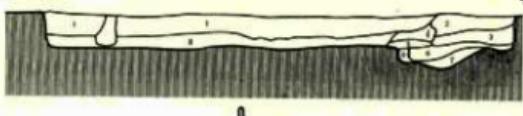


第7図 第2号住居址出土遺物

(3) 第3号住居址と出土遺物



A 387.16



B 387.16

第3号住居址 (第8図)

1区L-22グリットにおいて検出された竪穴住居址である。南北約2.8m、東西約2.8mの正方形を呈する住居址である。床面は良好であるが、柱穴は確認できなかった。壁高は約25cmあり、東壁の中央やや南側の位置にはカマドが構築されている。

カマド (第9図) の遺存状態は良好である。東壁を50cmほど掘り込み構築されている。両袖幅は90cmで、両袖部分に袖石を置き、粘土で覆って築いている。天井部は陥没していて、その土層中からは土器が検出された。なお火床面は住居址床面から約10cmほど掘りくぼめ構築されている。

2

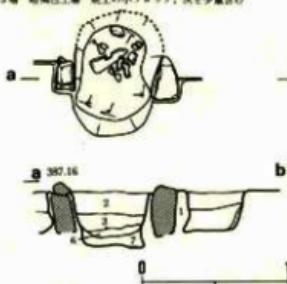
出土遺物 (第10図)

解説  
1層 棕褐色土層 地上の少量化  
2層 棕褐色土層 地上の少量化  
3層 棕褐色土層 地上の少量化

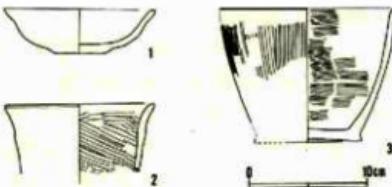
6層 粘土層 固化物、灰化物  
7層 灰化土層 粘土・灰化物  
8層 棕褐色土層 粘土・灰化物

本住居址からの遺物は少ない。1は壺形土器である。口径は13cm、底径は4.6cm、器高は3.8cmであり、胴部はやや膨らみをもつ器形である。器面は横ナデによる調整が行われている。胎土には長石の小粒子が入り、焼成は良好で、色調は黄褐色である。2は壺形土器であろう。口径は約13cmほどである。外面は縦方向に、内面は横方向に刷毛による調整がなされている。口縁部に横ナデがみられる。胎土には石英の小粒子が多量に含まれている。色調は茶褐色である。3は壺形土器である。口径は15cm、底径は9.2cm、器高は11.5cmである。底部近くからゆるやかに立ちあがる器形であり、外面は縦方向に刷毛目調整がみられ、さらに口縁部近くと胴部下半は、横ナデの調整が行われている。

第9図 第3号住居址カマド

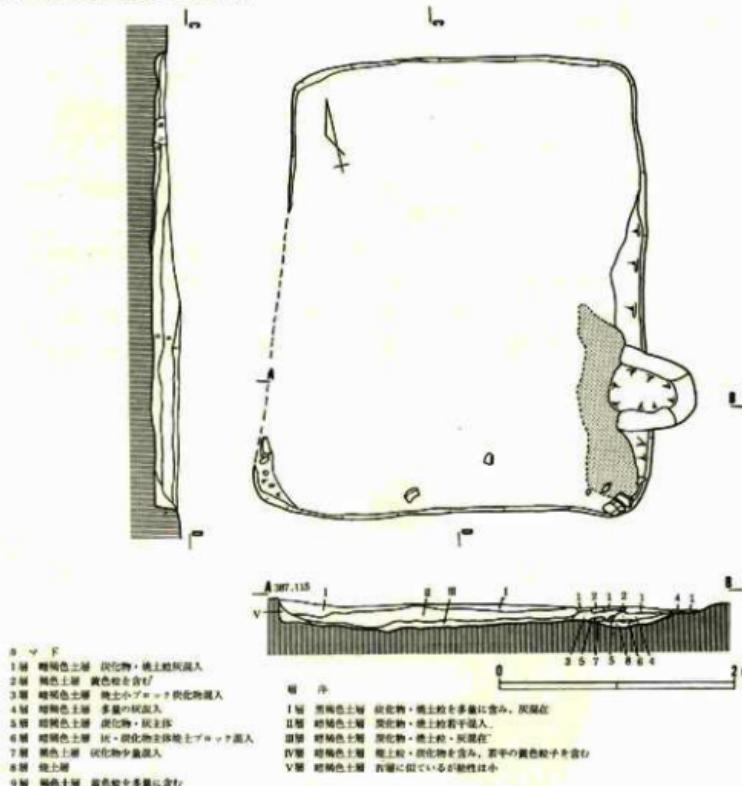


また内面も横ナデによる調整である。底部に木葉压痕らしきものがみられる。胎土は長石・金雲母が多量に含まれる。色調は茶褐色である。なお本土器と1の环形土器はカマド内出土である。



第10図 第3号住居址出土遺物

#### (4) 第4号住居址と出土遺物



第11図 第4号住居址

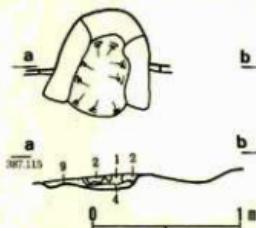
#### 第4号住居址（第11図）

I区L-23グリットにおいて検出された竪穴住居址である。西側に隣接して第3号住居址がある。南北の長軸3.9m、東西の短軸3.2mで隅丸長方形を呈する住居址である。壁高は20cmである。西壁の南半分近くは第3号住居址のカマドの屋外部分と接していて、壁高の確認はできなかった。東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。

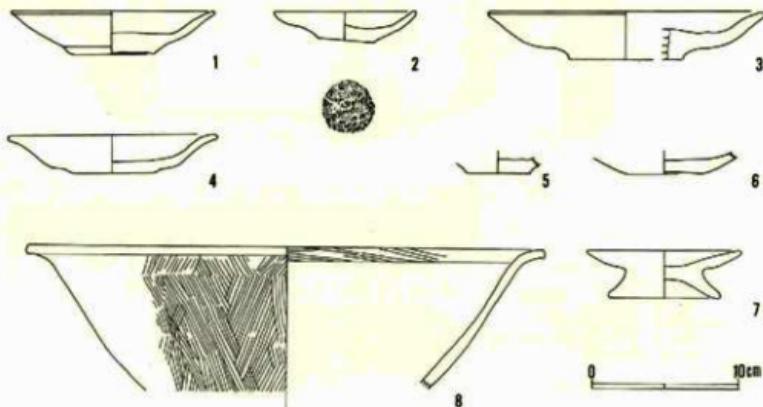
カマド（第12図）の遺存状態は良好である。東壁を40cmほど掘り込んで構築している。両袖幅は70cmである。袖石は検出されなかったが、カマド内には炭化物・焼土粒子・灰の堆積が多い量にみられた。住居址床面よりわずかに掘り込まれた火床面直上には、焼土層が5cmほど堆積していた。またカマド前部および両袖周辺にかけては、灰と炭化物の厚い堆積がみとめられた。

#### 出土遺物（第13図）

本住居址の遺物は、東壁カマド付近に多くみられる。1～6は壺形土器である。1～4までは胴部が膨らむ器形である。3は口径が最大で約19cmを測る。底部の厚さは2.0cmであり、底は回転糸切りである。横ナデ調整が施される。胎土は長石を含み、色調は黄褐色である。4の底部は厚くない。7は高台付壺形土器である。本土器は住居址の西南隅近くで出土した。口径は10.5cm、底径は7.2cm、器高は3.2cmである。横ナデ調整がみられる。色調は黄褐色である。8は大鉢形土器である。住居址の東南隅で出土した。口径約36cmで、口縁部は外反する。外面は縦方向に刷毛目調整がみられ、内面は口縁部に横方向の刷毛目調整があり、その下部は横ナデである。胎土に長石の小粒子を含み、焼成は良好である。色調は黒褐色である。

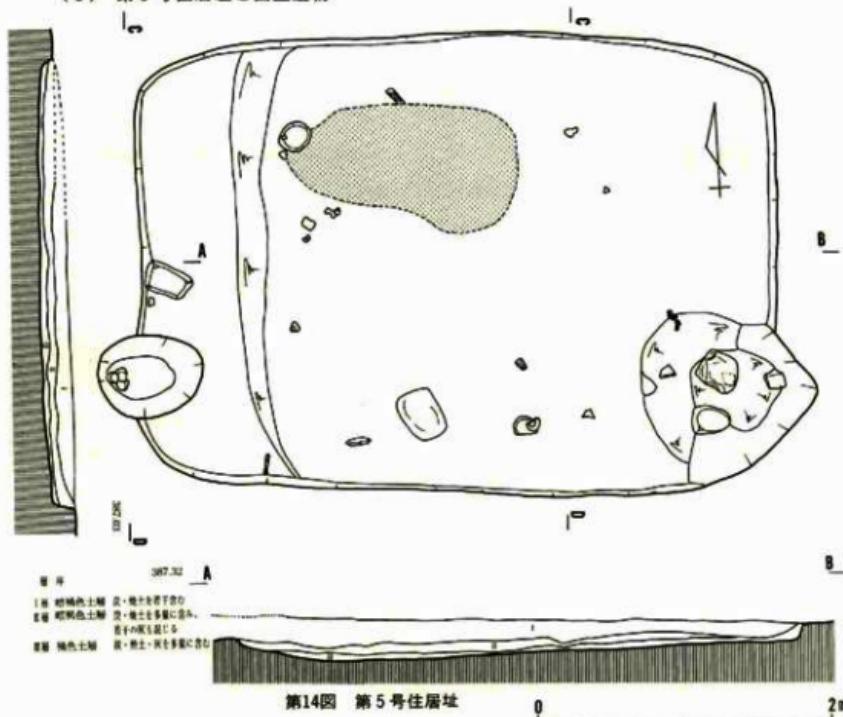


第12図 第4号住居址カマド



第13図 第4号住居址出土遺物

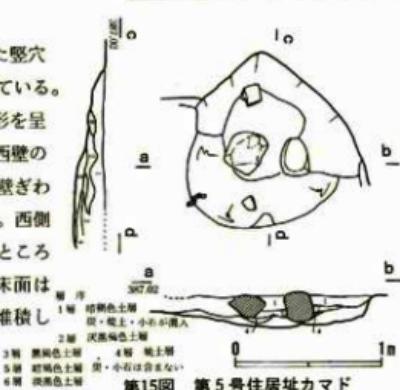
(5) 第5号住居址と出土遺物



第14図 第5号住居址

第5号住居址（第14図）

1区K-22・23グリットにおいて検出された竪穴住居址である。第4号住居址の北側に位置している。南北の短軸3.1m、東西の長軸4.4mの隅丸長方形を呈する住居址である。壁高は約15cmであるが、西壁の南端近くでは土塹と切り合っている。床面は壁ぎわでゆるやかに上がっているのが特徴的である。西側では顯著にみとめられた。また床面はいたるところで焼けていたが、住居址中央部で北壁寄りの床面はよく焼けており、焼土および炭化物が多量に堆積していた。カマドは南東端に築かれている。



第15図 第5号住居址カマド

カマド（第15図）の遺存状態は良好である。東壁を約30cmほど掘り込んで構築されていた。両袖幅はおよそ1mである。袖石の1つは動いているが、カマド内には灰や炭が多量に堆積し、カマド前部の床面も焼けている。

#### 出土遺物（第16図・第17図）

本住居址の遺物は比較的多く、土器や陶器および鉄製品などが出土している。1は壺形土器である。口径は9.6cm、底径は5.0cm、器高は2.6cmで、口縁部はゆるやかに外反する器形である。内外面とも横ナデ調整で、糸切り底である。色調は黄褐色である。2・3・4は灰釉陶器である。いずれも器形は壺である。2・3は口径約15.0cmである。袖層のうすい灰釉が器面に施されている。4は高台の径が7.1cmある。高台の一部には押圧されたゆがみがみられる。底部には糸切り痕がみられるが、高台のきわはナデによって消されている。内面底部は他の高台の輪郭がたどれるほどの施釉がみられる。刀子（第17図）は柄の部分を中心に約6.0cmが残っていた。本遺跡における唯一の鉄製品である。なお本住居址からは鉄滓の出土もみられた。

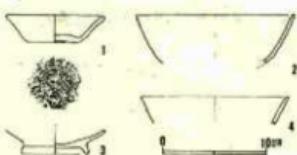
#### （6）第6号住居址と出土遺物

##### 6号住居址（第18図）

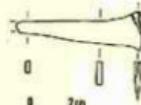
II区K-10・11～L-11・12グリットにおいて検出された竪穴住居址である。南北の長軸3.9m、東西の短軸3.2mの隅丸長方形を呈する住居址である。壁高は南壁側においては約10cmほどあるが、北壁側は約4.0cmである。東壁の中央南寄りにカマドが構築されている。カマドは東壁を約50cmほど掘り込んで築かれている。両袖の施設などは失われていて、火床部がわずかに残のみである。

##### 出土遺物（第19図）

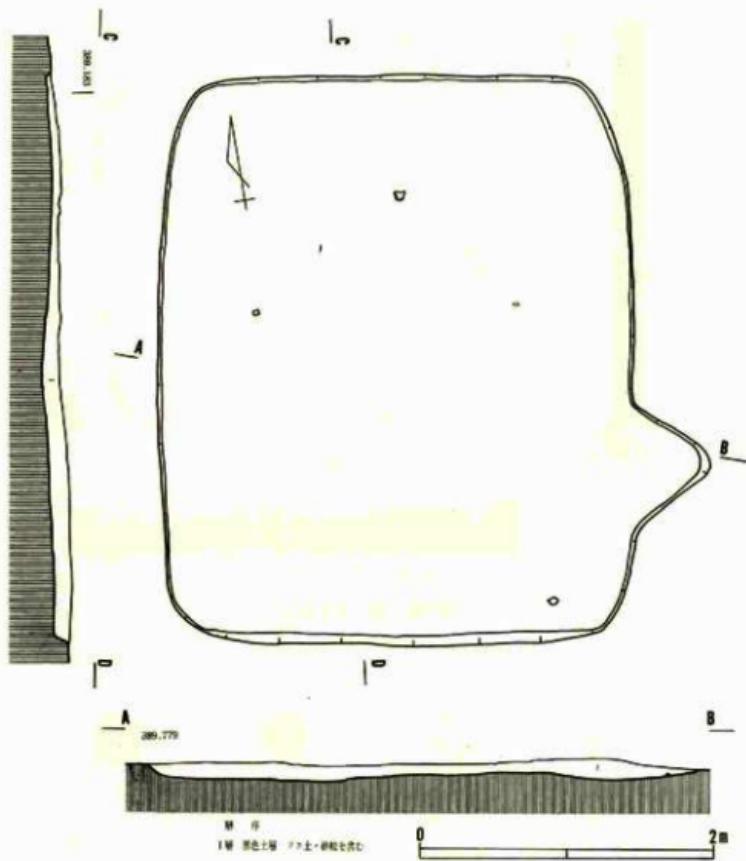
本住居址からの出土遺物は少ない。1は壺形土器である。口径は11.5cm、底径は5.2cm、器高は2.9cmである。胴下半がわずかに膨らみをもち、口縁部にかけてもわずかに外反する器形である。口唇部は0.4cmと厚い。糸切り底であり、外面および内面ともに横ナデ調整が施されている。また器面はザラザラしているが、焼成は良好で、色調は赤褐色である。



第16図 第5号住居址出土遺物(1)



第17図 第5号住居址出土遺物(2)



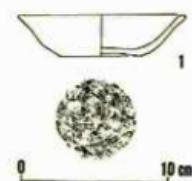
第18図 第6号住居址

#### (7) 第7号住居址と出土遺物

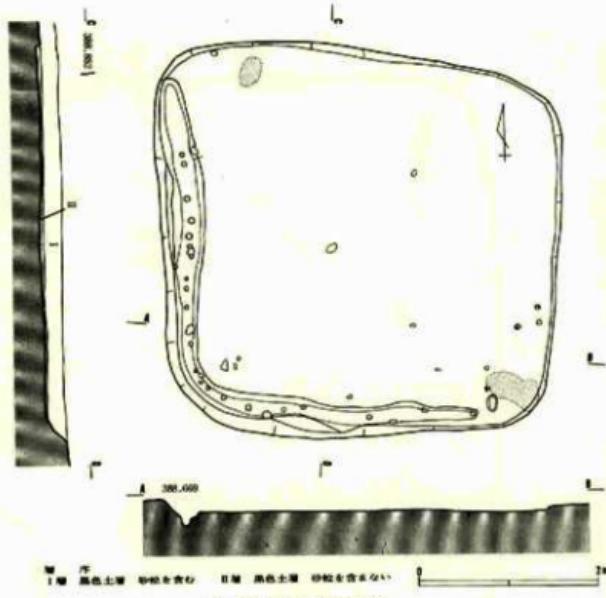
##### 第7号住居址（第20図）

II区J-8～J-9において検出された竪穴住居址である。南北約4.1m、東西4.5mの隅丸方形である。壁高は南壁が約50cmもあるが、北壁は約5.0cmほどであり、一部は壁が明らかにしにくい状態であった。

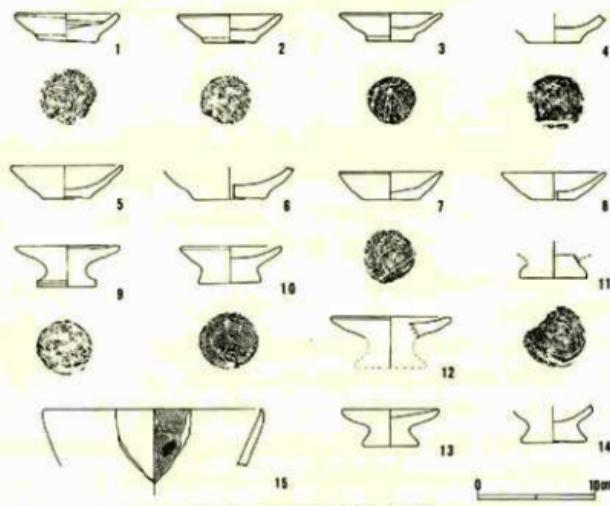
床面の一部で焼土が確認されている。南壁から西壁にかけてはその壁ぎわにそって、幅が約20cm～30cmの周溝が検出された。東壁の南端ではカマドの施設は明らかではないが、焼土の堆積がみられた。北壁では第9号住居址と重複関係にある。



第19図 第6号住居址出土遺物



第20図 第7号住居址



第21図 第7号住居址出土遺物

#### 出土遺物（第21図）

本住居址からの出土遺物は、完形および完形に近い土器が多く出土している。1～8は壺形土器である。1は口径が9.0cm、底径が4.8cm、器高が2.5cmである。厚くなっている底部が特徴的であり、さらに糸切り底である。器面は横ナデ調整が施されている。2の口径は9.2cm、5の口径は9.5cmである。いずれも胎土に金雲母がみられ、またザラザラした器面であり、厚みのある器形となっている。3は胴部がわずかに膨らむ器形である。胎土は緻密であり、器厚はうすい。焼成も良好で、色調は茶褐色である。4と6は底部の破片である。6は底径が約6.5cmある。7と8は底部に厚みをもたないものである。9～14は台付壺形土器で特徴的である。9は口径9.0cm、底径が5.1cm、器高が3.5cmである。壺部分の内縁はわずかであり、ほとんど平坦である。横ナデ調整が施され、底部は糸切りがみられる。10・13は壺部分の内縁が目立つが、14は明確である。いずれも胎土には金雲母や長石の小粒子がある。器面はザラザラしているが、焼成は良好で、色調は茶褐色である。15は壺形土器の口縁部と思われる。外面は縦方向に、内面は横方向に刷毛目調整がみられる。胎土に長石、金雲母の小粒子が混じる。焼成は良好で、色調は黒褐色である。

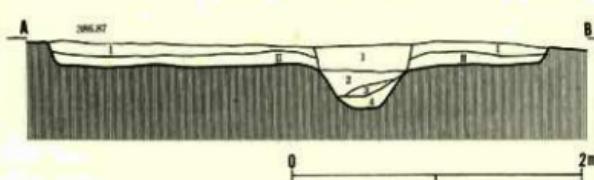
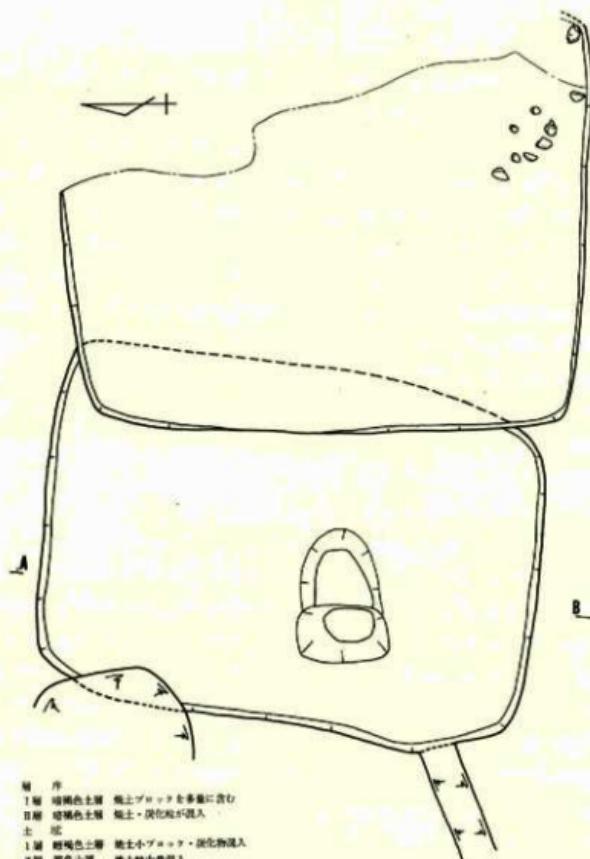
#### （8）第8号住居址と出土遺物

##### 第8号住居址（第22図）

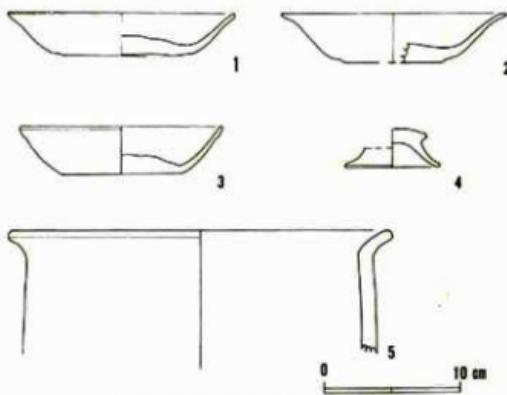
I区J-23グリットにおいて検出された堅穴住居址である。東壁側はカマド部分をふくめて水路改修工事によって失われている。南北は3.6m、東西は約2.6mまでを測れるが、実際は3.0m前後を考えることができる隅丸方形の住居址である。壁高は約5cmほどで、これは耕作によつて失われたらしく、きわめて低いものとなっている。また南東隅では灰および炭化物、焼土ブロックが検出されている。なお西側のJ-22グリットにおいて検出された第10号住居址と西壁部分で重複し、さらに南側のK-23グリットの第5号住居址ともわずかに南壁部分で重複している。切り合い関係の結果からは、本住居址の方が新しいことを確認している。

##### 出土遺物（第23図）

本住居址は、東側が失われているが出土遺物は多い。1・2・3は壺形土器である。1は口径が約17.0cm、底径9.0cm、器高3.1cmである。糸切り底の底部は、中心部が厚く、口縁部にむかってしだいに薄くなり、口縁部では外反する器形である。胎土には長石の小粒子を含み、器面はザラザラしている。内外面ともに横ナデ調整が施されている。色調は黄褐色である。2・3の口径は約16.0cm前後を測ることができる。4は高台付壺形土器である。壺部分は失われているが、底径は7.1cmである。底部の中心部に厚みをもつのは伴出する壺形土器と共通の特徴をもつものである。横ナデ調整がみられ、胎土には長石などの小粒子が含まれる。色調は黄褐色である。5は壺形土器である。口縁部は外反する。胎土は石英・長石・金雲母を多量に含む。外面は縦方向、内面は横方向にナデがわずかにみられる。色調は茶褐色である。

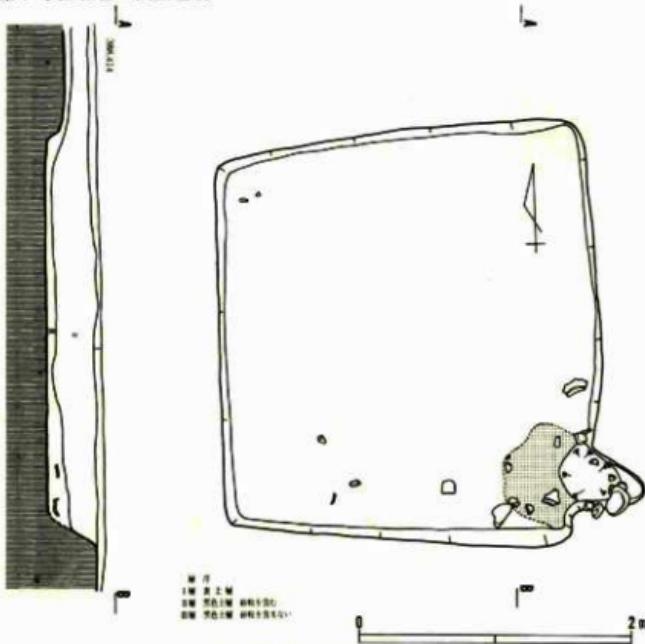


第22図 第8号・第10号住居址



第23図 第8号住居址出土遺物

(9) 第9号住居址と出土遺物



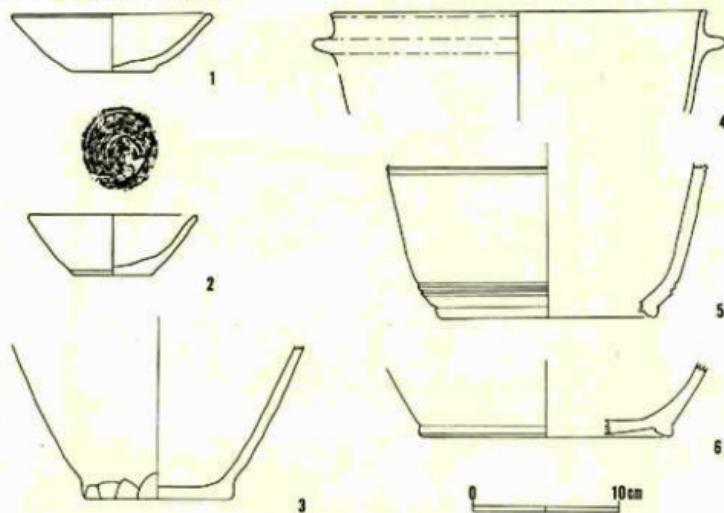
第24図 第9号住居址

### 第9号住居址（第24図）

II区I-9・10-J-9・10グリットにおいて、検出された竪穴住居址である。南北に3.0m、東西に2.8mを測る方形住居址である。壁高は南壁で約40cm、北壁で約10cmである。なお南壁と西壁の一部で第7号住居址と重複関係にあるが、本住居址が新しい段階であることが確認されている。東壁の中央南寄りにカマドが構築されている。カマド（第25図）は、東壁を50cmほど掘り込んで築かれているが、両袖の上部および天井部は失われている。カマド内には焼土堆積がみられ、最も厚いところで8.0cmを測る。またカマド前部の住居址床面は焼けており、このあたりからカマド内にかけて出土遺物が集中していた。



第25図 第9号住居址カマド



出土遺物（第26図）

第26図 第9号住居址出土遺物

本住居址からの遺物は、カマド周辺において土器や陶器が出土している。1・2は壺形土器である。1は口径が13.7cm、底径が6.0cm、器高3.9cmである。底部はわずかに膨らみをもつ器形である。底部には糸切りがみられる。器面はザラザラしているが、横ナデ調整が施されている。焼成は良好であり色調は茶褐色である。2は口径が約11.0cm、底径が4.2cm、器高は4.4cm

であり、胎土は緻密で焼成も良好である。3は變形土器である。胴部下半の一部から底部にかけてのものである。底径は10.5cmを測る。外面は縦方向、内面は横方向のナデ調整がみられる。胎土は石英・長石・金雲母が含まれている。焼成は良好で、色調はやや暗い茶褐色である。4は羽釜形土器である。口唇部から1.5cmの位置に幅1.5cm、厚さ0.5cm～1.5cmの鈎が付けられている。外面は縦方向にナデを行ない、さらに横ナデを施している。内面は横ナデ調整である。胎土は長石・金雲母の小粒子を含み、焼成は良好である。色調は黒褐色である。5・6は灰釉陶器の壺である。5は底部近くと胴部に二筋の弦線がめぐる。灰釉は底部近くまで施されている。6は胴下半部の一部から底部にかけての破片である。胴上部から流れた暗緑色の灰釉が一条みられる。無釉部分の色調は灰白色である。

#### (10) 第10号住居址と出土遺物

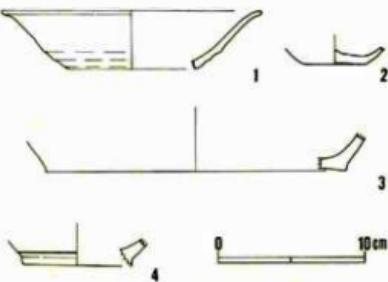
##### 第10号住居址（第22図）

I区J-22グリットにおいて検出された竪穴住居址である。南北3.4m、東西約2.1mの隅丸長方形の住居址である。なお東壁部分は隣接する第8号住居址と重複関係にあり、壁高は明らかではなかった。またカマドも第8号住居址によって破壊されたと考えられる。南壁は15cmで、北壁は10cmである。住居址の中央部分に2基の土坑が掘り込まれていたが、本住居址よりも新しいものである。

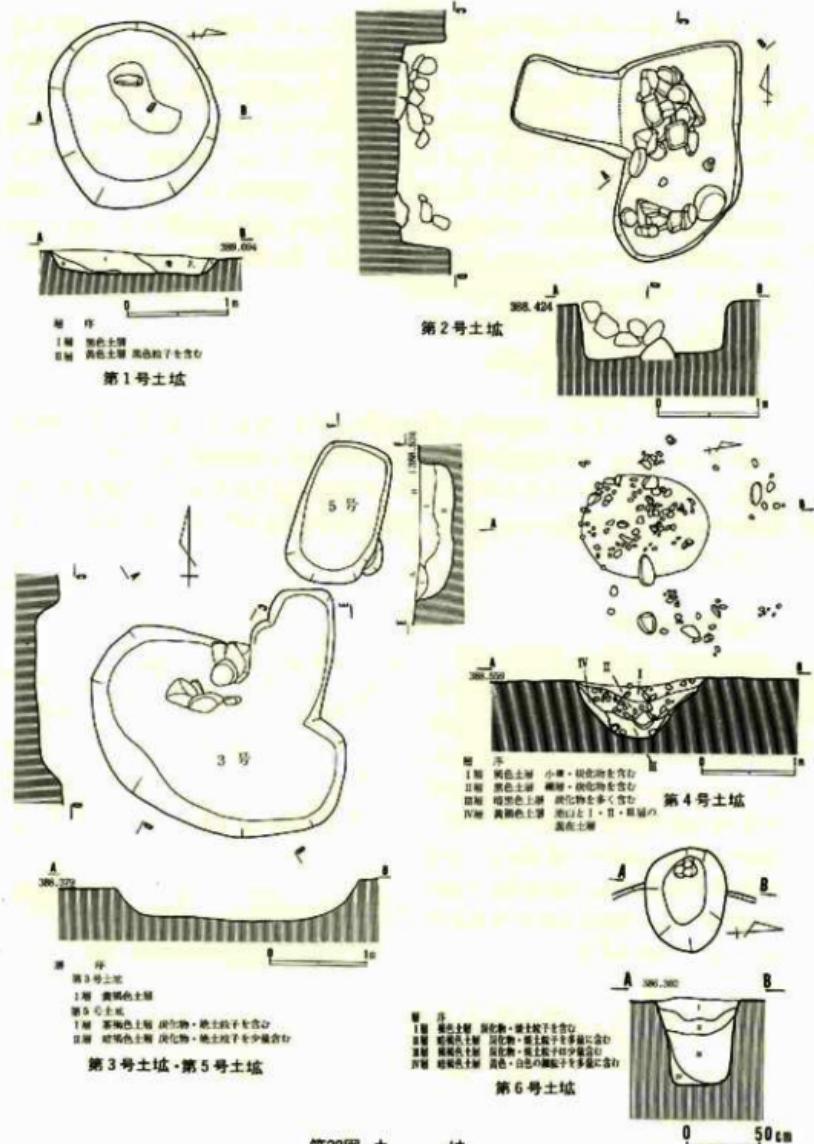
##### 出土遺物（第27図）

本住居址の出土遺物は、東南隅に構築されていたと推定されるカマド周辺に集中していた。1・2は壺形土器である。1は口縁部にむかって器厚が薄くなる器形である。

1・2ともに横ナデ調整である。胎土は長石などを含み、器面はザラザラしている。色調は茶褐色で、焼成は良好である。3は變形土器の底部である。胎土に長石・金雲母を多量に含む。焼成は良好で、黒褐色である。4は灰釉陶器の壺である。



第27図 第10号住居址出土遺物



第28図 土 塚

### (11) 土 坡 (第28図)

本遺跡における土坡は、STA560+20～+40の間に集中して検出された。土坡は石の入るものと入らないものとに分けることができる。なおいずれの土坡においても時期や性格等を明らかにする遺物は確認されなかった。

#### 第1号土坡

K-9グリットで南北径1.65mの円形の土坡である。北側に第7号住居址がある。土坡の深さは約20cmほどであるが一部に擾乱がみられる。

#### 第2号土坡

H-6・I-6グリットで約20cm～40cmほどの石が東西側から投げ込まれたように重なり合っている。深さは約60cmである。遺物はない。

#### 第3号土坡

I-7・8グリットで、第7号住居址の西側にある。東西径2.8mの楕円形で北側の一角に石が入り込んでいる。深さは約25cm～35cmである。遺物はない。

#### 第4号土坡

I-9グリットで、確認面では小礫が集中していたが、南北径1.4mの円形である。深さ約55cmほどであり、小礫と炭化物が多量に含まれている。東側に接して第9号住居址がある。

#### 第5号土坡

I-8グリットで、第3号土坡の北側にある。南北径1.5mの隅丸長方形である。深さ約35cmであり、内部に焼土粒子がみられるが、遺物はない。

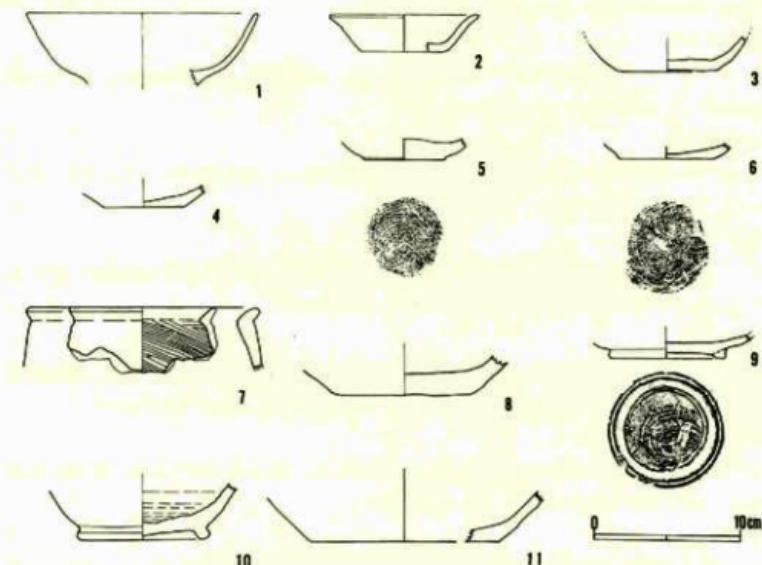
#### 第6号土坡

L-22グリットで、第5号住居址の西壁にかかる。東西径70cmの楕円形であり、深さは約60cmである。30cmほどまで炭化物、焼土粒子が多量にみられる。遺物はない。

本遺跡における土坡は、出土遺物もなく時期の決めてがない。第4号、第5号、第6号土坡では、炭化物、焼土などがみられることが注目される。なお土坡の集中していた地区は、本遺跡地内にあっては標高的に最も高い地域である。

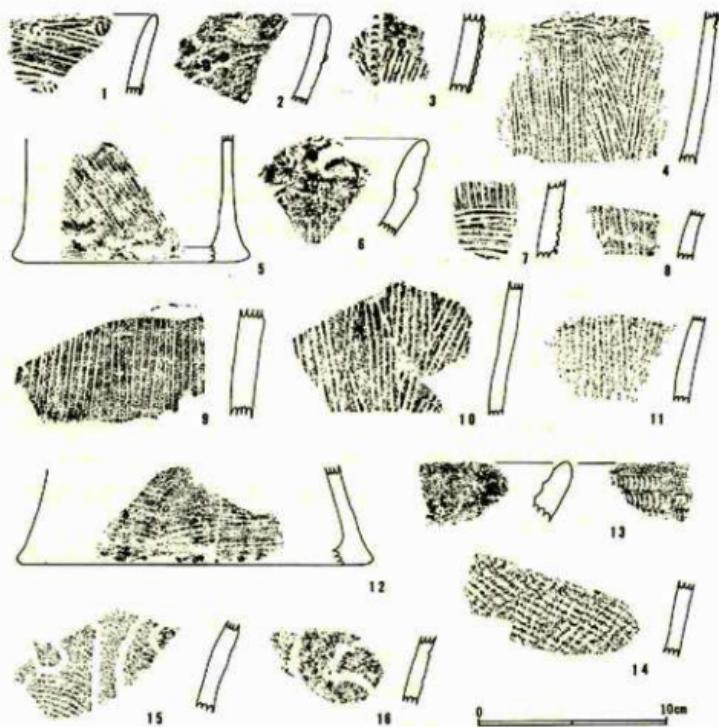
(12) 遺構外出土遺物

東新居遺跡における遺構確認の過程で検出された遺物は、住居址にともなう時期の土師質土器や陶器および縄文土器である。



第29図 遺構外出土遺物(1)

第29図1は塊形土器であろう。表土層出土で磨耗がはげしい。色調は茶褐色である。2～6は壊形土器である。2は口縁部が外反する器形である。器面は横ナデ調整が施されている。ザラザラしているが焼成は良好であり、色調は茶褐色である。3は胎土が緻密であり、焼成はきわめて良好である。4・5・6は底部であるが、5は中心部分が厚い器形である。7・8は壘形土器である。7は外反する口縁部の直下が厚くなっている器形である。外面は横ナデがみられるが、内面は刷毛目調整が強く施されている。胎土に長石・金雲母を含み、焼成は良好で、色調は黒褐色である。9は表土層より出土した縄輪の皿である。底径は8.5cmである。底部は糸切り底であるが、高台はすこし高くなっている底部に紐状の陶土を巻き付けて仕上げている。軸は高台の外縁まで施されている。色調は若緑色である。10・11は灰軸陶器である。10の器形としては瓶類であろう。底径は約9.0cmである。色調は灰白色である。11は壘類である。高台の付されないものである。胴部の最下部で無軸であるが、内面は底部まで施釉されている。



第30図 遺構外出土遺物(2)

第30図1～5は縄文時代前期の土器である。1は半截竹管状工具によって、沈線を横位に施し、貼付文を配している。なお貼付文上を半截竹管によって押圧しているが、2・3の貼付文にはそれがみられない。4は縦方向の沈線の間を斜行沈線でうめている。5は底部に向って斜行沈線を施している。いずれも胎土に石英・長石の小粒子を多量に含んでいる。焼成は良好で、色調は茶褐色である。諸磯c式土器に比定されよう。6～14は中期の土器である。6は波状口縁であり、胎土には石英・長石・金雲母を含む。7は縦位と横位に深い沈線を施す。胎土は緻密で、焼成は良好である。8～11は縦位に太い沈線が施されるものである。12は胴部の下部に横位に沈線が施されている。13は口縁部内側に三条の爪形状の連続文がめぐる。器形は浅鉢であろう。14は縄文である。五領ヶ台式土器に比定されよう。15・16は後期の土器である。15は縄文を地文とし、沈線による曲線的な文様を配し、その内側は磨消縄文の技法をもちいている。16は磨耗によって地文が明らかではないが、曲線的な沈線は明らかである。堀之内式土器に比定されよう。

## 第IV章 成果と課題

### 第1節 平安時代末期の堅穴住居址について

東新居遺跡において検出された第1号住居址から第10号住居址の10軒は、すべて平安時代の堅穴住居址である。そのうち重複関係にある住居址は、第7号住居址と第9号住居址で、第9号住居址が切られ、第8号住居址と第5号住居址では、第5号住居址が切られる。第1号住居址は、本遺跡内でも長軸5.6m、短軸5.0mの隅丸方形を呈するもので最大の住居址である。長軸が南西から北東、短軸が南東から北西であり、他の住居址の軸が南北と東西であるとの異なっている。また出土遺物の土師器の环によれば、およそ9世紀第3四半期をあてることができ、本遺跡のうち最も古い時期の住居址である。

第1号住居址を除く9軒については、その時期の主体は11世紀後半から12世紀前半におくことができる。なお第3号住居址はやや時期を下げることが可能であろう。9軒の住居址は、その一部においてプラン確認が明確ではなかったが、住居の面積は約7m<sup>2</sup>から20m<sup>2</sup>までである。なかでも13m<sup>2</sup>前後の住居が一般的な面積になる傾向にある。柱穴は床面および壁外においては、いずれも検出することができなかった。この時期における堅穴住居構築上の特徴であろう。壁については各住居址の遺存状態が必ずしも良好とはいはず、結果的には全体として壁高は低いものとなっている。なお第4号住居址、第5号住居址の壁ぎわは、ゆるやかに床面が立ちあがっているのが特徴的であった。カマドの位置については、施設が削平され失われた住居址もあったが、9軒のすべてが東壁側にあり、その中央南寄りないし南隅に構築している。またカマドの両袖部分は袖石をおき粘土でおおって築かれている。

本遺跡の10軒のうち、第1号・第3号住居址を除いた8軒は、平安時代末期のものとして把握することができるのであるが、この時期に該当する県内の遺跡をもとめるると、本遺跡の所在する一宮町地内において確認することができる。両ノ木神社第3・第4号住居址<sup>(註1)</sup>、勝沼バイパス319地点第4・第8・第15・第17号住居址<sup>(註2)</sup>、274地点第1・第2・第3号住居址<sup>(註3)</sup>などをあげることができる。これらの遺跡は、本遺跡より北西方向に約1.5km前後に位置していたものである。大石川と金川に挟まれた、東西約2.5km区間のバイパス建設にともなって調査された遺跡であり、標高は305m～355mである。この区間には扇状地の扇端付近に発達した坪井・竹原田・鶯堂・東原・末木などの集落がある。平安時代の住居址はこれらの集落間に点在していた。なお東原の北側には林部があり、「和名抄」に記載された林戸郷に関連する地名が残る地域である。

各住居址の概要は次のようである。両ノ木神社第3・第4号住居址は重複関係にあるが、第4号住居址の南北の径は約4.0mを測る。東西は発掘区外におよび不明であるが、隅丸方形である。両住居址ともカマドは南東隅に築かれる。柱穴はなく、周溝がみられる。

勝沼バイパス319地点第4号住居址は南北5.0m、東西5.0mで隅丸方形である。カマドは北東隅で石を多用し、煙道も明確である。柱穴、周溝はみられない。319地点第8号住居址では南

北2.9m、東西2.6mの方形である。カマドは北西隅で、柱穴、周溝はない。319地点第15号住居址は南北5.13m、東西5.28mの方形である。南東隅に焼土堆積があり、カマドの位置を推定している。柱穴、周溝はないが、「住居址北壁よりにいくにしたがって床が上っており、とくに皿、器台等が集中して検出された」とことを指摘し、担当者は確信はないしながらも「一見祭壇を連想するような状況である」としている。274地点第3号住居址は南北4.6m、東西3.7mで台形である。いずれもカマドは北東隅で、柱穴、周溝はない。

なお末木地内の「274地点の住居址について」は、東原地内の319地点第4号住居址、337地点第1号住居址との間に共通性をもとめ、斎一性の強い厚手の土師器の壺・皿・台付壺の出土および他の土師器がみられないことを指摘し、他の住居址との構造の異なる点をあげている。そのことを要約すると(1)カマドが北東隅で、カマドは住居址の中心に向って開く、(2)土師質土器が出土した住居址は南北方向が長くなっている、(3)住居址の軸の方位はやや東向きである、(4)床面が段になっている住居址が存在する、という4点である。

以上、両ノ木神社遺跡および勝沼バイパス遺跡の住居址の概要を述べてきたが、本遺跡の住居址について、上述の4点を主体に検討してみると、(3)の東向きについてはすべての住居址にあてはまることがある。ただしこのことは扇状地上の北傾斜面に占地した住居は、おのずから地形に制約されることが考えられよう。(1)のカマドについては北東隅ではないが、一定の方向に設けられていること、(2)の南北方向に長いこと、(4)の床面が立ち上がること、これらから本遺跡の第7号住居址は、両ノ木神社第3・4号住居址との共通性がみられるのである。すなわち南北4.0mほどでカマドは南東隅にあり、周溝もみられることがある。また第4・第5号住居址は、前述の「274地点の住居址について」に示されている各住居址との間で、床面が壁ぎわにいくにしたがって上がっていくことで共通性をもっているのである。

これらのことから本遺跡の住居址は、各遺跡の住居址と多くの点で共通する要素を確認することができたといえよう。ただし複数の要素で共通する部分はあっても、現段階での類例では平安時代末期の住居形態や構造の普遍性を導きだすことは困難であろう。

### 註

1. 山本寿々雄他 1972『甲斐国分寺周辺聚落址の調査（予報）—両ノ木神社付近の場合』山梨県教育委員会
2. 山本寿々雄他 1972『勝沼バイパス道路建設に伴う古代甲斐国の考古学調査』山梨県教育委員会
3. 森本圭一他 1975『勝沼バイパス道路建設に伴う古代甲斐国の考古学調査（続編）』山梨県教育委員会
4. 註2に同じ。

## 第2節 平安時代末期の土器について

### (1) 土師質土器について

山梨県における平安時代土器の編年研究は、その発掘遺跡数の増加等にともない、近年大いに進展している傾向にある。とりわけ平安時代末期の様相についても、東山梨郡勝沼町、東八代郡一宮町地内における出土例などによって、それらの編年が整いつつあるのが現状である。<sup>出1)</sup>特に坂本美夫・末木健・堀内真等により『奈良・平安時代土器の諸問題』において詳細な編年が提示されたのが注目される。これらの成果をふまえつつ、東新居遺跡における出土土器について若干の考察を試みたい。

第1号住居址出土土器は、土師器の壺と甕である。壺は口径11.5cm、底径6.5cmで暗文が施される。甕は口縁部が外反し、刷毛目調整である。9世紀第3四半期をあてる。

第2号住居址出土土器は、土師質土器の壺・高台付壺・甕・羽釜である。壺は回転糸切り未調整と横ナデ調整である。甕の口縁は水平に開く器形で、高台付壺は足高高台である。11世紀後半をあてる。灰釉陶器は伴出しない。

第3号住居址出土土器は、土師器の壺と小型甕である。カマド内出土である小型甕には刷毛目調整がある。壺の胴部がやや膨らむ器形は特徴的である。10世紀第2四半期～第4四半期をあてておきたい。

第4号住居址出土土器は、土師質土器の壺・高台付壺である。壺は口径が約14cm～19cmと大きいものもある。底部が肥厚するのも特徴的である。11世紀後半をあてる。灰釉陶器は小破片が出土。大鉢はやや時期を下げて考えたい。

第5号住居址出土土器は、土師質土器の壺である。11世紀後半をあてる。灰釉陶器が出土。

第6号住居址出土土器は、土師質土器の壺である。11世紀後半をあてる。灰釉陶器は出土しない。

第7号住居址出土土器は、土師質土器の壺・台付壺・台付皿・甕である。器厚は厚みをまし各器種の間に齊一性がある。12世紀前半をあてる。灰釉陶器の小片が出土。

第8号住居址出土土器は、土師質土器の壺・台付壺・甕である。壺は口径が約15cm～17cmである。高台付壺である。甕は口縁部、胴部とも厚手である。11世紀後半をあてる。灰釉陶器の小破片が出土。

第9号住居址出土土器は、土師質土器の壺・甕・羽釜である。羽釜はやや薄手である。11世紀後半をあてる。灰釉陶器の壺の大破片が出土。

第10号住居址出土土器は、土師質土器の壺・甕である。11世紀後半をあてる。灰釉陶器の小破片が出土している。

以上、本遺跡の出土土器の時期は、その初めを9世紀第3四半期からその終りを12世紀前半までとした。第1号住居址から第10号住居址のうち、その主体は第2号・4号・5号・6号・8号・9号・10号住居址の11世紀後半である。第3号は壺と甕との共伴関係において、甕をやや古く置くことができ、壺についても土師質までは新しくできないと考えられる。住居址の重

複関係からは、第5号と第10号を第8号住居址が切る関係にあるが、時期的な点では大差がないといえよう。第7号と第9号の関係は明確に時期の差をうかがうことができる。第7号の土器は肥厚した形態で齊一性があり、本遺跡内でも特徴的なものである。第9号は羽釜をもち、坏は口径が約11.5cm、14cmとやや大きく、焼成もきわめて良好で硬質である。第7号の坏は約9cm以内と小型化の傾向にあり、その差異は明らかである。重複関係としては一例であり、さらに第9号の土器組成としてはやや不十分な感はあるが、第7号の出土土器を本遺跡内で最も新しい時期として12世紀前半とした。さらに土師質土器のうち台付坏のあり方については、勝沼バイパス337地点第1号住居址例をもって特殊な位置づけを予想しているが、平安時代末期においては必ずしも特殊なものではなく、一般的な土器であり住居形態であることを理解しておきたい。

また、12世紀前半の土器をともなう遺跡としては、勝沼バイパス338地点第1号住居址、同319地点第4号住居址、同274地点第3号住居址があげられるが、本遺跡の土器を若干古くおいて考えることができよう。なお平安時代末期の土師質土器をともなう遺跡は、一宮町地内笠木本地蔵遺跡、北堀遺跡においても確認されていることから、これらの整理報告をまってより詳細に検討されることが期待されよう。

第1表 住居址内土器出土状況一覧表

	第1号	第2号	第3号	第4号	第5号	第6号	第7号	第8号	第9号	第10号
坏	□	○	○	○	○	○	△	○	○	
台付坏		○		○			△	○		
甕	□	○	○				△	○	○	○
羽釜		○							○	
灰釉	/	/	/	4点	8点	/	4点	2点	2点	1点

□…9世紀後半、○…10世紀中～後半、○…11世紀後半、△…12世紀前半

## (2) 灰釉陶器について

山梨県内における灰釉陶器については、その出現を10世紀第2四半期頃におき、多量に安定した供給が行われた時期を11世紀前葉におき、全く見られない時期を12世紀前半においている。<sup>(註2)</sup> 東新居遺跡から出土する灰釉陶器は、住居址の遺存状況にもよるが、必ずしも多いとはいえない。このことは灰釉陶器の出土量が、やや減少する傾向にある時期を示すものであり、その時期を11世紀後半におくことができよう。

なお第7号住居址のものについては、やや検討をするものである。第7号住居址の時期を12世紀前葉（11世紀後葉～12世紀初頭）にあてたが、この時期の基準として灰釉陶器の見られないことをあげている。ここでは数点の灰釉陶器がともなっていることから、11世紀後半を考えることも可能である。ただし土師質土器の台付坏のあり方などから、12世紀前半のうち最も早い時期におくことが妥当であろうと思われる。

本遺跡の灰釉陶器は、勝沼バイパス遺跡のものが東濃の光ヶ丘1号窯式から大原2号窯式が主体であるのに対し、同じ東濃の虎渓山1号窯式が主体である。11世紀前半（10世紀後葉～11世紀初頭）では、大原2号窯式の製品がほとんどを占める状況であるが、11世紀前半では、大原2号窯、虎渓山1号窯、丸石2号窯などの製品がみられるという傾向からも、本遺跡が11世紀後半から12世紀前半を中心に存在した集落であったことが理解されるのである。

#### 註

1. 板本美夫他 1983年「シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題—相模國と周辺の様相—第Ⅱ版」『神奈川考古』第14号
2. 註1と同じ

#### 参考文献

- 上野晴朗 1965 「一宮町周辺の土師器考」（『甲斐史学』丸山国雄会長還暦記念特集号）
- 板本(菊島)美夫 1975 「山梨県に於ける晩期土師式土器編年試論」（『甲斐考古』12の2）
- 末木健 1976 「中部地方の平安時代土師器編年の諸問題」（『山梨県中央道埋蔵文化財調査報告書—北巨摩郡須玉町地内』山梨県教育委員会）
- 山崎金夫 1977 「勝沼バイパス道路建設に伴う一大切遺跡発掘調査報告書」山梨県教育委員会
- 齊藤孝正 1981 「尾北窯における灰釉陶器の変遷」（『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅲ一小牧市森岡古窯址群』小牧市教育委員会）
- 服部敬史 1982 「南武藏における古代末期の土師器様相」『東京考古』1
- 大江幸 1970 「平尾山遺跡、虎渓山遺跡—中央自動車道路緊急発掘報告書—」多治見市教育委員会

# 図 版

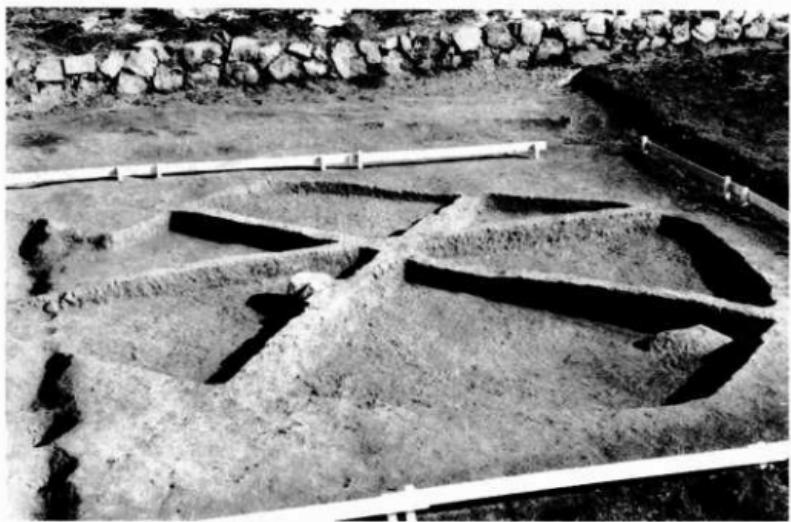
図版 1



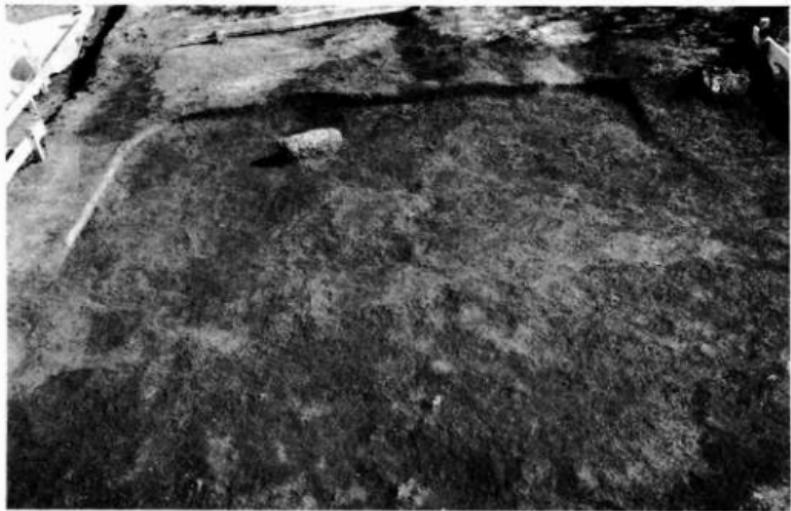
(1) 遺跡全景



(2) 発掘風景



[1]第1号住居址



[2]第2号住居址

图版 3



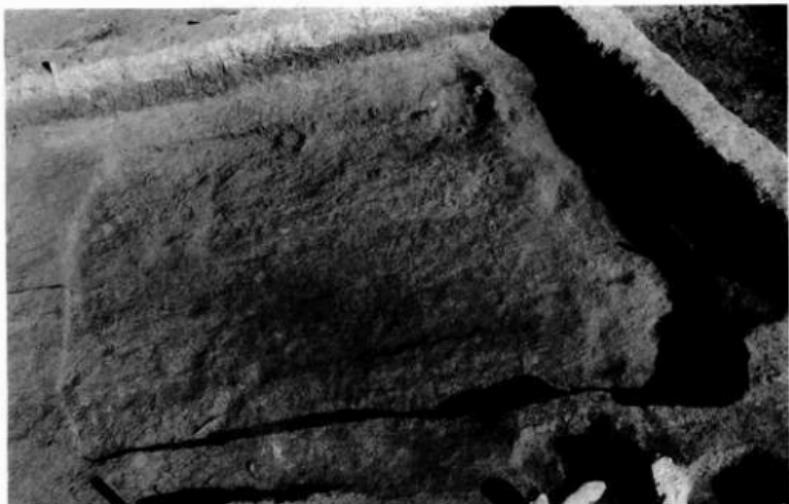
(1) 第2号住居址土器出土状况



(2) 第3号住居址

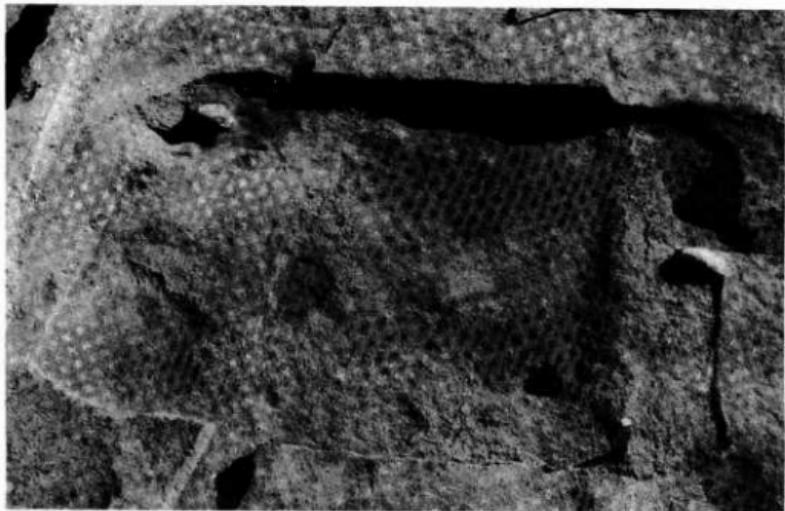


(1) 第3号住居址カマド



(2) 第4号住居址

図版 5

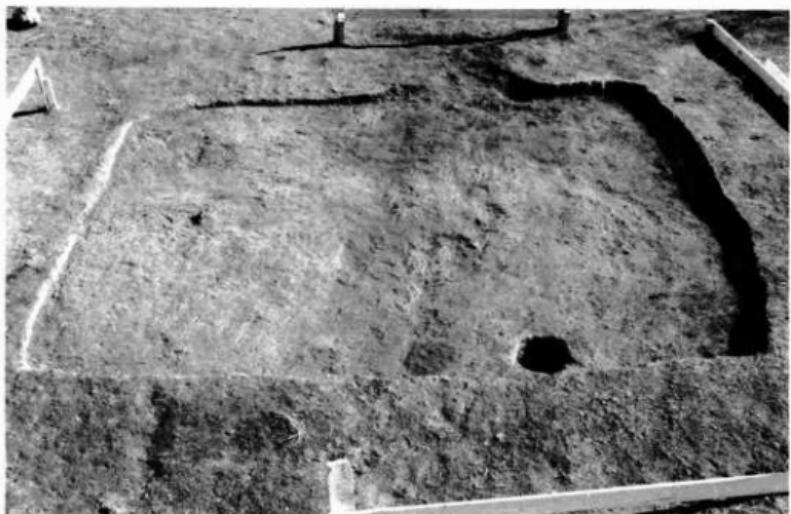


(1) 第5号住居址

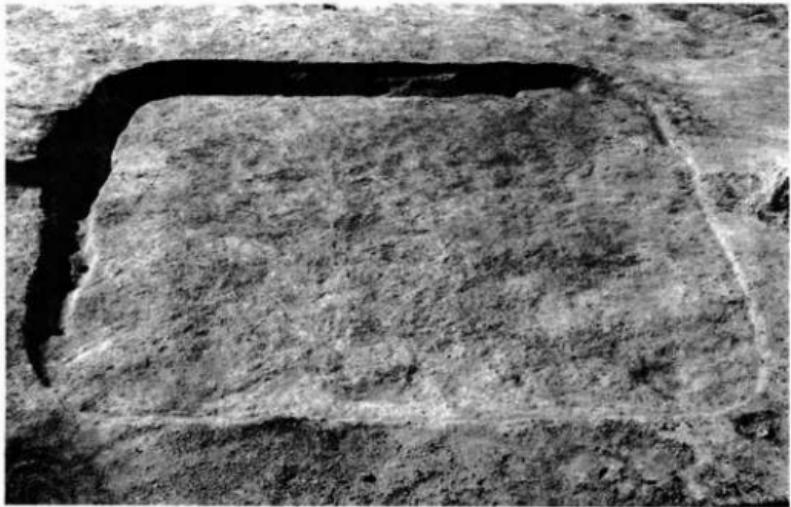


(2) 第5号住居址カマド

图版 6



(1) 第6号住居址



(2) 第7号住居址

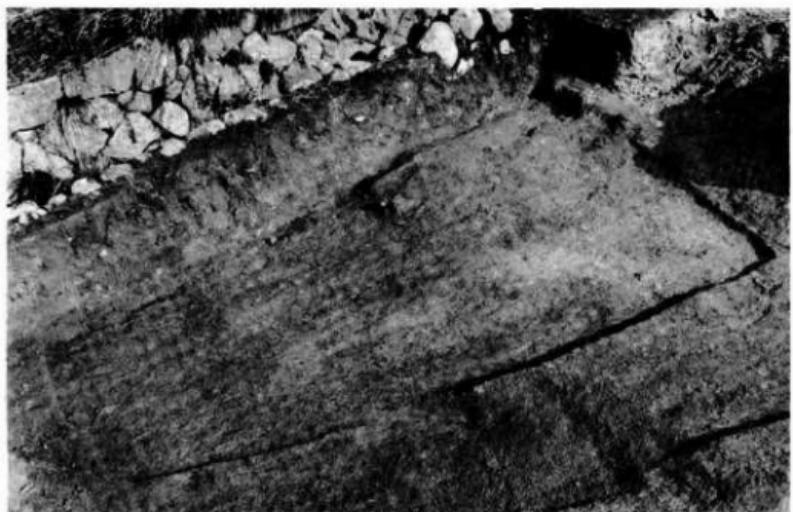
图版 7



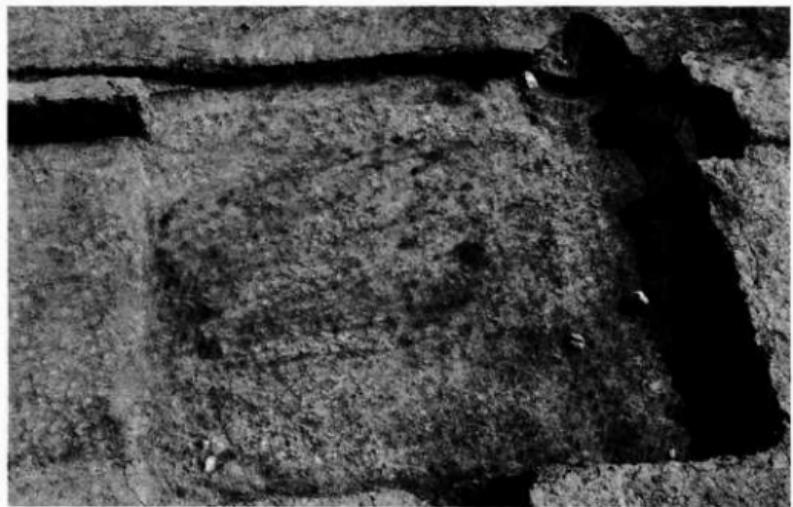
(1) 第 7 号住居址土器出土状况



(2) 第 7 号住居址土器出土状况



(1) 第 8 号住居址、等10号住居址

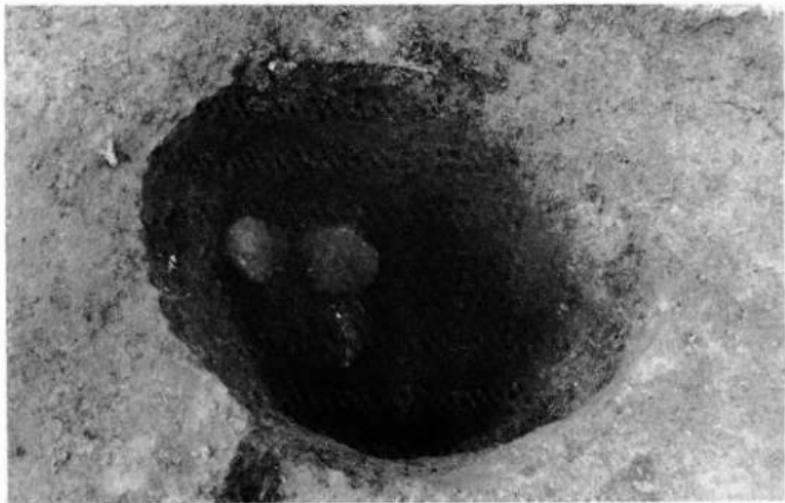


(2) 第 9 号 住居址

図版 9



(1) 第9号住居址カマド



(2) 第6号土塙

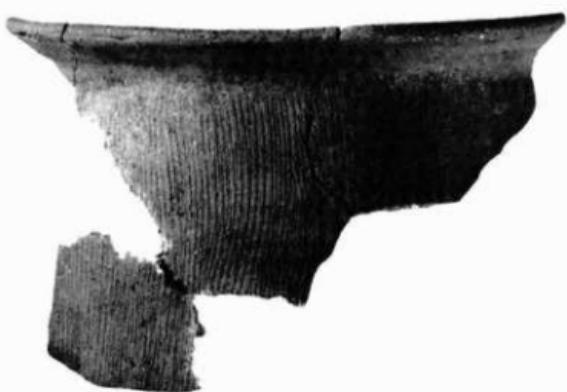


(1) 第 5 号土坡



(2) 第 3 号土坡

圖版 11



(1) 第 1 号住居址出土遺物

图版 12



(1) 第 2 号住居址出土遗物

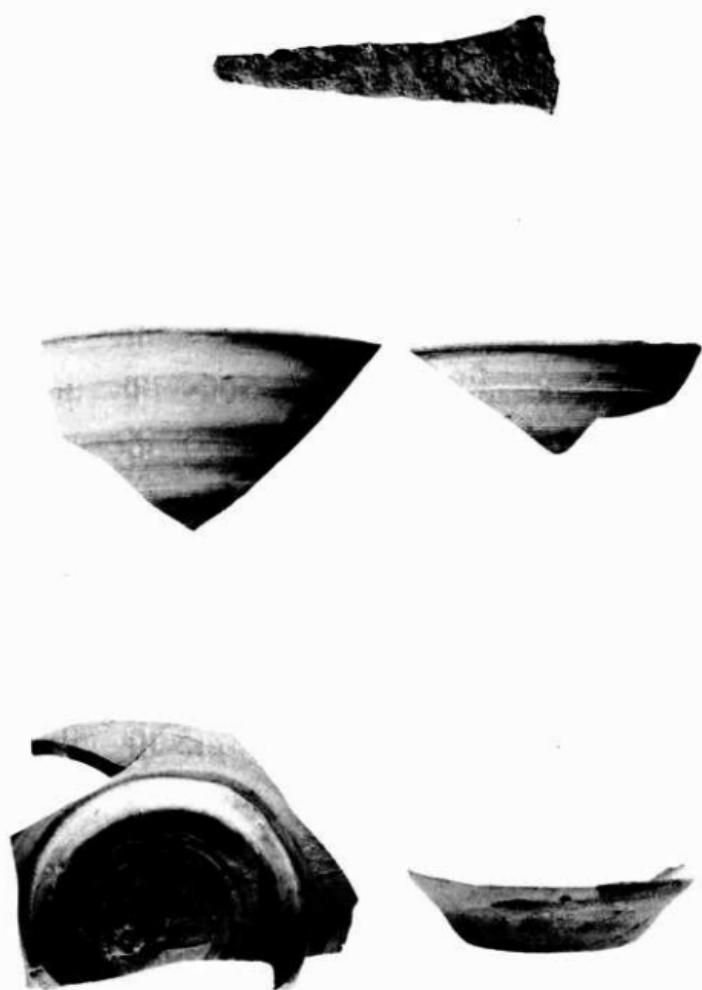
图版 13



(1) 第3号住居址出土遗物



(2) 第4号住居址出土遗物

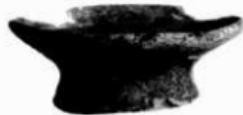


(1) 第 5 号住居址出土遗物

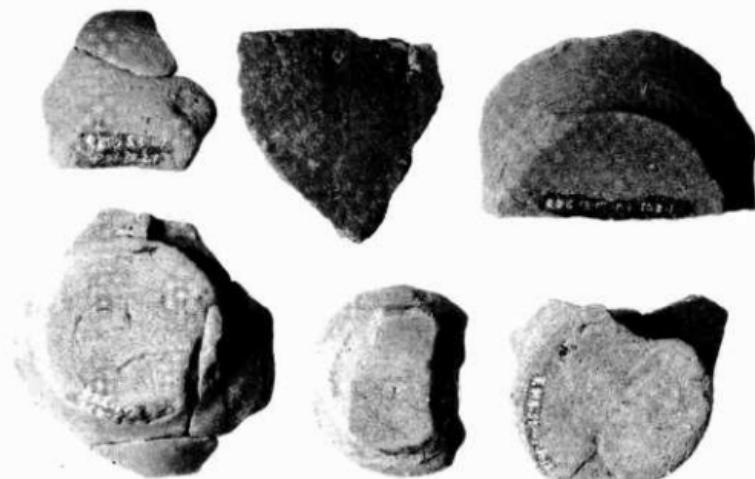
圖版 15



(1) 第 6 号住居址出土遺物



(2) 第 7 号住居址出土遺物



(1) 第 7 号住居址出土遗物

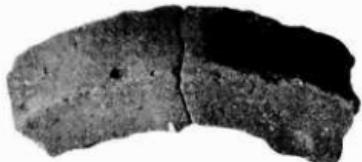


(2) 第 8 号住居址出土遗物

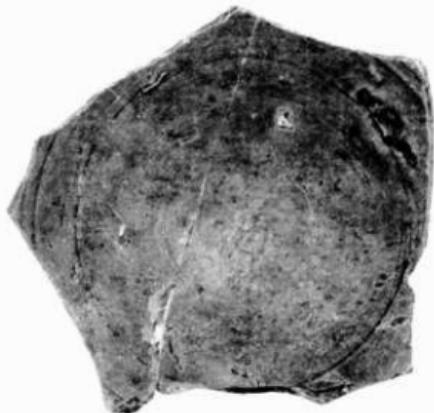
图版 17



(1) 第9号住居址出土遗物



(1) 第10号住居址出土遺物



(2) 造構外出土遺物

圖版 19



(1) 遺構外出土遺物



(2) 遺構外出土遺物

昭和59年3月25日 印刷  
昭和59年3月31日 発行

豆塚遺跡  
東新居遺跡

山梨県中央自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行所 山梨県教育委員会  
日本道路公団

印刷所 ふたば印刷

